

青ノ山南麓における 埋蔵文化財調査概報

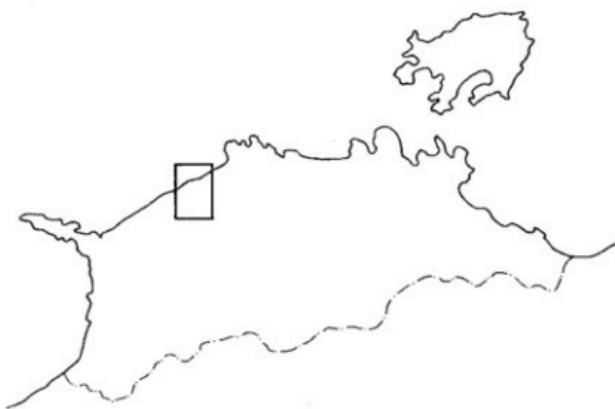
—香川県丸亀市飯野町所在の
後期古墳と須恵器窯の調査—

1980年9月

丸亀市教育委員会

青ノ山南麓における
埋蔵文化財調査概報

——香川県丸亀市飯野町所在の
後期古墳と須恵器窯の調査——



1980年9月

丸亀市教育委員会

序 文

丸亀市内最大の古墳・吉岡神社前方後円墳の尾根続きの青ノ山は、古く1号墳の発掘より次々と貴重な遺跡が発見され、いま第7号墳の発見にいたり、古代この周辺に存在した部落国家の長を葬った大規模な古墳群の調査保存が急がれている折も折、昭和54年4月、土地開発事業中、前記の青ノ山7号墳（通称竜塚）の一部が破壊されているとの連絡を市教育委員会が受理し、早急、発掘調査の必要に迫られ、香川県教育委員会と協議の上、緊急発掘調査団を結成し、同年4月下旬より発掘調査に着手した。この調査は残存部の狭道と墓道との緊急発掘が重点であった。

然るに発掘調査中、青ノ山南麓の北東傾斜面から土地造成の土砂採取中に掘出した花崗土の中から、窯壁片数点と須恵器片多数が発見され、それが須恵器の登り窯跡であることが確認され、県・市両教育委員会協議の上、同年5月中旬から7号墳と同時に、この登り窯の調査にも着手した。

そもそも、青ノ山は古くより一名土器山と呼ばれ、土器に因縁深く、山そのものが豊かな陶土地質であって、登り窯の発見は、むしろ遅きに過ぎた感がある。しかし、発掘調査団によって、ありし昔の貴重な遺跡をさまざまと見ることが出来たことは意義深いものがある。この発掘調査に多大のご努力を払っていただいた県教育委員会の各位をはじめ、市教育委員会の各位に対し、厚く謝意を表して、調査報告書の序にかえる次第である。

昭和55年9月

青ノ山第7号墳発掘調査団

代表者 吉岡 和喜治

例 言

1. 本書は、丸亀市飯野町字山下・青ノ山南麓地区の果樹園造成・整地事業に伴い一部原因者の負担として丸亀市教育委員会・青ノ山7号墳発掘調査団が発掘調査を実施した青ノ山7号墳・1号窓の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は香川県教育委員会文化行政課伊沢肇一・竹下和男・真鍋昌宏が担当し、事務は丸亀市教育委員会社会教育課が担当した。
3. 本書の執筆・実測・写真・トレース等は伊沢・竹下・真鍋が分担し、真鍋が編集した。
4. 遺跡の調査・遺物に関して金沢芳弘氏ならびに文化行政課諸氏の助言・協力を得た。
又、調査中、市立墓地公園管理事務所・都築畠業の協力を得た。
5. 1号窓櫛の分析に関しては香川大学教授 坂東祐司氏・助教授 谷山 篤氏に依頼し玉稿をいただいた。記して謝意を表したい。
6. 遺跡の所在
青ノ山7号墳 丸亀市飯野町東分字山下599番地の2
青ノ山1号窓 丸亀市飯野町東分字山下580番地の2

調査の組織と構成

1. 発掘調査の組織

調査委託者 沖野義一氏
都築畠業（代表取締役 都築伊佐夫氏）
調査主体 青ノ山7号墳発掘調査団
(団長 吉岡和喜治)
丸亀市教育委員会
(教育長 井沢滋)

2. 発掘調査の構成

調査担当 香川県教育委員会文化行政課
事務担当 丸亀市教育委員会社会教育課 (小橋清信・長尾和彦)
発掘担当 文化財専門員 伊沢肇一
主任技師 竹下和男
技師 真鍋昌宏

本文目次

I 調査に至る経過と調査の概要	(真鍋)	1
II 位置と環境		
1. 地理的環境	(伊沢)	2
2. 歴史的環境	(竹下)	2
III 青ノ山1号窯		
1. 位置と現状	(竹下)	6
2. 主体部	(竹下)	7
3. 遺物の出土状況	(竹下)	8
4. 遺物	(真鍋)	9
5. 小結	(竹下)	13
(付) 青ノ山1号窯天井部の窯壁の岩石について		14
IV 青ノ山7号墳		
1. 位置と現状	(伊沢)	16
2. 墳丘	(伊沢)	17
3. 埋葬施設	(伊沢)	19
4. 遺物	(真鍋)	21
5. 小結	(伊沢)	25
V 丸亀市立資料館所蔵資料	(真鍋)	
1. はじめに		26
2. 青ノ山古墳群関係		27
3. 青ノ山2号窯(仮称)		28
4. その他		30
VI まとめにかえて	(真鍋)	
青ノ山7号墳と1・2号窯の関係		38
青ノ山古墳群の動向		38
丸亀平野における青ノ山古墳群の位置		41

図 版 目 次

- 図版 1 (1) 1号窯現状(調査前)
(2) 1号窯現状(調査開始後)
2 (1) 1号窯横断面(北から)
(2) 1号窯近景(北から)
3 (1) 1号窯全景(北から)
(2) 1号窯全景(南から)
4 (1) 1号窯遠景(調査終了後)
(2) 1号窯遠景(埋戻し状況)
5 (1) 調査区遠景(北東から)
(2) 7号墳玄門部
6 (1) 7号墳玄門部(調査前)
(2) 7号墳調査風景(西から)
7 (1) 7号墳葬道西壁(南東から)
(2) 7号墳葬道東壁(南西から)
8 (1) 7号墳羨門部西壁(東から)
(2) 7号墳羨門部東壁(西から)
9 (1) 7号墳葬道西壁全景(南東から)
(2) 7号墳葬道東壁全景(南西から)
10 (1) 7号墳葬道全景(南から)
(2) 7号墳葬道全景(南・上方から)
11 (1) 7号墳第Ⅰトレンチ(南から)
(2) 7号墳第Ⅱトレンチ(北から)
12 (1) 7号墳第Ⅲトレンチ(北から)
(2) 7号墳第Ⅳトレンチ(東から)
13 (1) 7号墳第Ⅴトレンチ(南西から)
(2) 7号墳第Ⅵトレンチ(東から)
14 (1) 7号墳羨道及び羨門閉塞部(南から)
(2) 7号墳第Ⅰトレンチ北壁(南から)
15 (1) 7号墳墓道上面(北西から)
(2) 7号墳墓道縦横断(南西から)
16 (1) 7号墳墓道内須恵器出土状況(北から)
(2) 7号墳玄門部(北から)
17 (1) 青ノ山7号墳(奥壁) 破壊前
(2) 青ノ山7号墳(西側壁) 破壊前
18 (1) 青ノ山7号墳(玄門部) 破壊前
(2) 青ノ山7号墳(羨道から奥壁を望む) 破壊前
19 (1) 青ノ山1号墳の現状
(2) 青ノ山1号墳(奥壁)
20 (1) 墓地公園東古墳の現状
(2) 青ノ山3号墳の現状

挿 図 目 次

第1図	青ノ山位置図	中表紙
第2図	青ノ山周辺の遺跡	3
第3図	青ノ山1号墳地形測量図	6-7間
第4図	青ノ山1号窯平・縦断面図	6-7間
第5図	青ノ山1号窯横断面図	7
第6図	青ノ山1号窯出土須恵器実測図	10
第7図	青ノ山1号窯壁片試料の粉末X線回折パターン	15
第8図	青ノ山7号墳掲載実測図位置図	16
第9図	青ノ山7号墳地形測量図・トレンチ配置図	18
第10図	青ノ山7号墳石室実測図	19-20間
第11図	青ノ山7号墳第Ⅱ・Ⅲトレンチ北壁断面図	19-20間
第12図	青ノ山7号墳石室断面図	19-20間
第13図	青ノ山7号墳閉塞部・墓道縦断面図	19-20間
第14図	青ノ山7号墳第Ⅰトレンチ北壁断面図	19-20間
第15図	青ノ山7号墳第Ⅳトレンチ平・断面図	20
第16図	青ノ山7号墳第Ⅴトレンチ半・断面図	20
第17図	青ノ山7号墳出土須恵器・上師器実測図	22
第18図	青ノ山7号墳出土金環実測図	21
第19図	青ノ山古墳群出土須恵器実測図	26
第20図	青ノ山古墳群出土鉄器実測図	27
第21図	青ノ山古墳群出土金環・ガラス小玉実測図	28
第22図	青ノ山2号窯出土須恵器実測図	29
第23図	丸亀市立資料館蔵須恵器実測図(Ⅰ)	30
第24図	丸亀市立資料館蔵須恵器実測図(Ⅱ)	31
第25図	丸亀市立資料館蔵埴輪実測図	32
第26図	丸亀市立資料館蔵中世土器実測図	32
第27図	青ノ山古墳群分布図	39

表 目 次

第 1 表	青ノ山周辺の遺跡	4
第 2 表	青ノ山 1 号窯遺物観察表	11
第 3 表	青ノ山 7 号墳遺物観察表	23
第 4 表	青ノ山古墳群遺物観察表	33
第 5 表	青ノ山 2 号窯遺物観察表	34
第 6 表	丸龜市立資料館所蔵遺物観察表	35
第 7 表	出土須恵器から見た青ノ山古墳群の動向	38
第 8 表	青ノ山古墳群一覧表	40

I 調査に至る経過と調査の概要

昭和15年4月上旬、丸亀市教育委員会から香川県教育委員会に対し、古ノ山7号墳（通称亀塚）が所在する青ノ山南麓地区が、果樹園造成・整地事業に伴い削平を受け、7号墳が半壊したとの連絡があった。

これに対して、県教育委員会文化行政課の技師が現地の確認を行った。この時点で、横穴式石室の玄室が全壊し、羨道部のみが残存する状況であった。

県教育委員会と丸亀市教育委員会の協議の結果、「青ノ山7号墳発掘調査団」を結成し、残存部分の調査を実施することになった。

調査員は、県教育委員会文化行政課から伊沢・竹下・真鍋の三名が派遣され、事務は丸亀市教育委員会社会教育課が担当することになる。

4月中旬、伊沢・竹下・真鍋は丸亀市教育委員会社会教育課・工事担当の都築貞業と協議し、4月23日から10日間の予定で調査することとし、調査費の一部を原凶者が負担することで合意した。

7号墳調査中、地元金沢芳弘氏から、工事区域内に須恵器窯が所在するとの教示を得、金沢氏採集の須恵器片を実見させていただいた結果、県内でも最古に属する須恵器窯である可能性が高まり、7号墳の調査と併行して位置の確認を行った。

この須恵器窯の確認により、再度協議が行なわれ、丸亀市教育委員会が主体となり、7号墳に継続して調査を実施することになった。

7号墳・1号窯の調査終了後、工事区域内の埋蔵文化財分布調査を行い、5月30日にすべての作業を終了した。

調査の成果として、7号墳の構築過程・墓道の確認・閉塞部の構造等、青ノ山山麓に分布する群集墳の成立過程等について資料を提示することができた。

1号窯の検出は、古墳時代の須恵器窯の空白地帯をうめることができ、丸亀平野を問む青ノ山山麓、飯野山北西麓、菩提寺市域に分布する後期古墳を考えるうえで重視しうる。

又、構造面からも、花崗岩盤を削抜いている点で興味深い。

こうした1号窯の重要性から、現地保存を前提とした調査を実施し、結果的に窓内埋土を半分除き、横断面開作用に三ヶ所埋土を除去するにとどめた。

6月下旬、保存方法等についての指導のために国立奈良文化財研究所から安原啓示・沢田正昭両氏が来讃され現地視察を行なった。

10月下旬、保存方法の決定があるまで、埋め戻しておくことにし、土袋積みの後シートをかけた。

II 位置と環境

1 地理的環境

本墳の所在する青ノ山は丸龜平野のほぼ東端にそそり立つ。

丸龜平野は、香川県のほぼ中央部にあり、阿讃山中に源を発し県下最大の流量をほこる土器川と、満濃池に源を発する金倉川の両河川に開まれた肥沃な沖積平野である。

青ノ山は標高 224.5 m を計り、丸龜市と宇多津町にまたがって從えるビュート状独立峰。その西側を、土器川が北へ流れ備讃瀬戸に注いでいる。また、青ノ山南東には円錐型独立峰、飯ノ山 (421.9 m) が聳え、その東を大東川が流れ青ノ山東麓から海へと注いでいる。

青ノ山は頂部から尾根が数条派生し複雑な地形を呈している。その南麓は中腹より上分、東分に向かう二条の尾根に分岐する。後者の尾根はさらに二つに分岐し、一つは真南に走り先端近くに吉岡神社古墳を有し、一つは南東に走り、字山下に至る。

青ノ山 7 号墳は字山下に至る尾根稜線上に立地し、東下方に青ノ山墓地公園がある。この尾根は北より標高 50.1 m, 51.3 m, 49.2 m の 3ヶ所の微高地を有するが、整地及び果樹園造成のために既に、稜線より東側は削平され、三番目の微高地も分断・独立している。さらに稜線上の第 2 微高地に立地する 7 号墳のうち玄室は欠落しており、談道のみが現存している。

青ノ山 1 号塚は第 1 微高地の中腹北東斜面に立地する。谷筋から稜線に向かう全地下式の竪穴式石室で、室本体は 80% 程度残存している。

2 歴史的環境

丸龜平野とその周辺部では旧石器時代、縄文時代の遺跡は未確認である。土器町出土と伝えられる木の菱形の石槍（ポイント）が発見されてはいる①が、この時代つまり洪積世は現在の丸龜平野は未発達で浅瀬あるいは海であった可能性が強いからである。とすると、青ノ山や飯野山は海岸近くの島であったことになる。

弥生時代は金倉川・土器川によって沖積平野が形成され、その低地に稻作が本格的に開始された時代であり、そして丸龜平野に遺跡が確認され始める時代である。肥沃で広大な丸龜平野を背景とした稻作の弥生文化は県下では最大級の繁栄をみせたと思われる。この古代勢力の豊かさは丸龜平野を見下す、丸龜平野西部・普通寺市の丘陵地近郊だけで銅劍 27 本、銅矛 1 口、銅鋒 2 口の青銅器が出土した②ことでもしのばれる。弥生前期の遺跡としてヘラがきによる平行波線文を施した菱形土器片・壺形土器片を出土した多度津町三井遺跡③と溝状遺構と小ピット群を検出し前期の弥生土器を伴出した丸龜市中ノ池遺跡④がある。弥生中期・後期には壺棺や箱式石棺や土器散在地といった形で、前期以上に広範囲な山裾、平野部に多く確認されていく⑤が十分な調査は行われておらず今後に期待したい。

古墳時代の遺跡は墳墓が主体となる。弥生時代に丸龜平野の西部で隆盛を誇った古代勢力は受



第2図 青ノ山周辺の遺跡

第1表 青ノ山周辺の遺跡

番号	遺跡番号	遺 跡 名		所 在 地	内 容	備 考
1	7-15	聖通寺山古墳	円 墳	宇多津町平山		
2	7-18	田尾茶臼山古墳	前方後円墳	板出市板出町田尾		
3	7-20	南田尾山古墳	円 墳	"		
4	7-21	潮見場古墳	円 墳	板出市板出町新浜		
5	7-23	山田古墳	円 墳	板出市川津町山田		
6	7-24	下川津古墳	円 墳	板出市川津町下川津		
7	7-10	岩屋古墳		宇多津町		
8	7-6	宝塚古墳		宇多津町字夫隣		
9	7-11	青ノ山山頂古墳		丸龜市七器町青ノ山		
10						
11						
12	7-167	吉岡神社古墳	前方後円墳	丸龜市飯野町吉岡		
13	7-163	土居高木塚古墳	円 墳	丸龜市城東町		
14	7-164	おかね塚古墳		丸龜市土居町		
15	7-26	小山古墳	円 墳	板出市福江町小山		
16	7-27	茶臼山古墳	前方後円墳	板出市川津町峰蓮		
17	7-170			丸龜市飯野町山崎		
18	7-171		箱式石棺	"		
19	7-176	喜多荒神古墳		飯山町西坂元		
20	7-177	三ノ池古墳	前方後円墳	飯山町西坂元三ノ池		
21	7-179		箱式石棺	飯山町川原輪見		
22	7-180	富熊神社古墳	円 墳	穂歌郡穂歌町栗熊西		
23	7-178	次郎山古墳群	円 墳	飯山町下法草守岡		
24	7-181	富熊神社古場古墳	前方後円墳	穂歌郡穂歌町宮熊		
25	7-173	行者塚古墳		丸龜市川西町宮ノ前		

け難がれ、普通寺市普通寺町伏見の北向八幡古墳を最大のものとして同市に16基の前方後円墳が集中し、うち5基は積石塚であるという特異性を持っている⑥。この頃の丸龜平野の東部に確認できる古墳として青ノ山南西山麓の丸龜市飯野町吉岡の吉岡神社古墳と穂歌町富熊の富熊神社神事場古墳(沖古墳)がある。後者は宅地化のため破壊され、径16mの後円部を残すのみであるが、前者は今も前方後円墳の形を明瞭にとどめている。全長50m、前方部巾16m、高さ2m、後円部径20m、高さ4m。堅穴式石室を持ち、筒形銅器、銅鏡5枚、鉄刀子の出土をみている。また、新たに報告されたものとして、丸龜市墓地公園東端の標高875mの高所に墓地公園東古墳があり、組合せ式箱式石棺を内部主体とし、地山整形による墳丘をもっている。⑦

古墳時代後期に盛行した群集墳は青ノ山山麓に数多く報告され、命名されている青ノ山1号墳より青ノ山7号墳の7基のすべてが後開古墳にあたる。これらを概略的に述べてみよう。

青ノ山1号墳(青ノ山山頂古墳)は両袖式の横穴式石室を内部主体とする円墳で径15m前後。

青ノ山2号墳(青ノ山中腹古墳)は堅穴式石室を内部主体とする小円墳。

青ノ山3号墳(田瀬神社周辺に3基所在したと伝えられるもののうち現存する1基)は横穴式石室を内部主体とする径15m前後の円墳。

青ノ山4号墳(郡星石鏡神社西古墳)は径12mの円墳で片袖の横穴式石室を有する。

青ノ山5号墳(土器村史に掛橋山古墳とあるものか)は長さ約7.5mの両袖の横穴式石室を内部主体とする円墳。

青ノ山6号墳は片袖の横穴式石室を内部主体とする小円墳。

青ノ山7号墳(竪塚)については、破壊前に青ノ山古墳群の概要確認を行った調査団により以下のように報告されている。

「青ノ山南嶺部の尾根先端からやや奥地の微高地に立地する。南西に開口する両袖の横穴石室を内部主体とする径25m前後の群中最大の規模を持つ円墳である。石室全長9.5m、玄室の長さ3.8m～3.9m・巾2.4m・高さ2.5m、奥壁に花崗岩の巨大な鏡石を用いる。羨道は5.7mを測る長大なもので玄門部は1.3mを測るが羨門に近づくにつれて徐々に広まっている。」『墳丘規模の大きいことや奥壁ほかに使用されている石材の巨大などから、香川県の要所に所在する巨石墳とともに注目されるべきものである。』

これらの他に青ノ山1号墳から青ノ山13号墳に至る道筋に須恵器片と鉄器片の表採、青ノ山7号墳の南東50mの尾根の微高地(既に削平されて存在しないが、石室のものらしい巨石が拂土に含まれていた)や、山頂までの遊歩道の左右、宇多津町側からの山頂までの道路工事中に発見されたものなど、今後もその数を増すことは間違いない⑧。

これら後期古墳の中で青ノ山6号墳は発掘調査が行われ、出土遺物によって6C後半の始め頃より7C前期までと考えられ2・3回の追葬の可能性大とする⑩。

歴史時代になると丸亀市城は那珂郡に屬し、柞原、金倉、喜徳、郡家、櫛無、垂水郷が含まれる。市内の平野部は条里の模跡が明瞭に残っておりN30°Wの方位を示す。この中に奈良時代の創建にかかる古代寺院跡が確認され、田村跡・宝幢寺跡⑪がそれである。

<注>

- ① 「新修丸亀市史」 丸亀市編
- ② 「青銅の武器」 1980. 九州歴史資料館
- ③ 「古代史発掘」第5巻 破口隆康編
- ④ 昭51年度に香川県教育委員会が香川県重要遺跡確認調査を行った。
- ⑤ ③に同じ。
- ⑥ 「讃岐の前方後円墳」 1979 (香川史学8号) 玉城一枝
- ⑦ 「青ノ山6号墳調査報告」 1977. 丸亀市教育委員会・香川県教育委員会 以下7号墳までの記載もこれに依る。
- ⑧ ⑦及び丸亀市の金沢氏、宇多津町教委藤田氏に依る。
- ⑨ ⑦に同じ。
- ⑩ 「宝幢寺跡発掘調査報告」 1980. 丸亀市教育委員会

III 青ノ山1号窯

1 位置と現状

青ノ山1号窯は香川県丸亀市飯野町東分字山下に位置する。青ノ山は丸亀市と綾歌郡宇多津町にまたがり標高2245mを計る。頂上付近は古銅輝石安山岩、他はややわらかい花崗岩類より成る。窯の周辺は風化したものは上器用の粘土として適しているとされる黒雲母花崗岩である①。

南麓は中腹より2条の尾根に分歧し、1つは真南に走り先端近くに吉岡神社古墳を有し、1つは南東に走り字山下に至る。青ノ山1号窯は後者の尾根の北東斜面中腹に立地する。窯より北西100mに青ノ山16号墳、西300mに青ノ山5号墳、南東150mに青ノ山7号墳があり、これら古墳群と密接な関係があろうことは容易に推察される。

青ノ山南東山麓のうち標高約2.5~4.0mの比較的なだらかな斜面は墓地公園として既に開発されており、広々とした芝生や季節を彩る花樹が市民にいこいの場を提供している。青ノ山1号窯の発見はこの公園の南の尾根を整地及び築樹園造成のため削平中になされたものである。比高2.0~3.0mのこの尾根も既に半分以上が削平され黄茶褐色の剣阻な段崖の上に松や雑木が見られるといった程度である。

青ノ山1号窯は金沢氏の発見時点では段崖の中腹に露呈していたため全地下式の窯という様相は全くなく、遠い過去に天井部が崩れ落ちたらしい窯体内部には土砂や窯壁が充満していた。最も多數の遺物を包含していたであろう灰原や前庭、窯体の規模や構造を知る上で重要な意味を持つ煙道・焚口・焼成部はその痕跡すらとどめていなかった。

まず、崖部の排土を完全に取り除くことから調査は始められた。窯は比高1.0m程の崖部のほぼ中央に垂直に燃焼部付近、水平に天井部よりやや下付近で切断された焼成部のみの状態で露出した。

原地形から判断するに本窯は須恵器としては県下で唯一の窯窓（全地下式）であることが確定的となったため、保存を前提とし、完掘はさけることとした。天井部は発見以前に崩れていたが、比較的に西半分の残りが良かったので東半分を発掘し、構造・規模・残存状況・地形測量の調査を行った。この後、本整地工事が青ノ山1号窯の立地する尾根全体に及ぶ為、未造成地区の埋蔵文化財の分布調査を行ったが、他には何も確認できなかった。

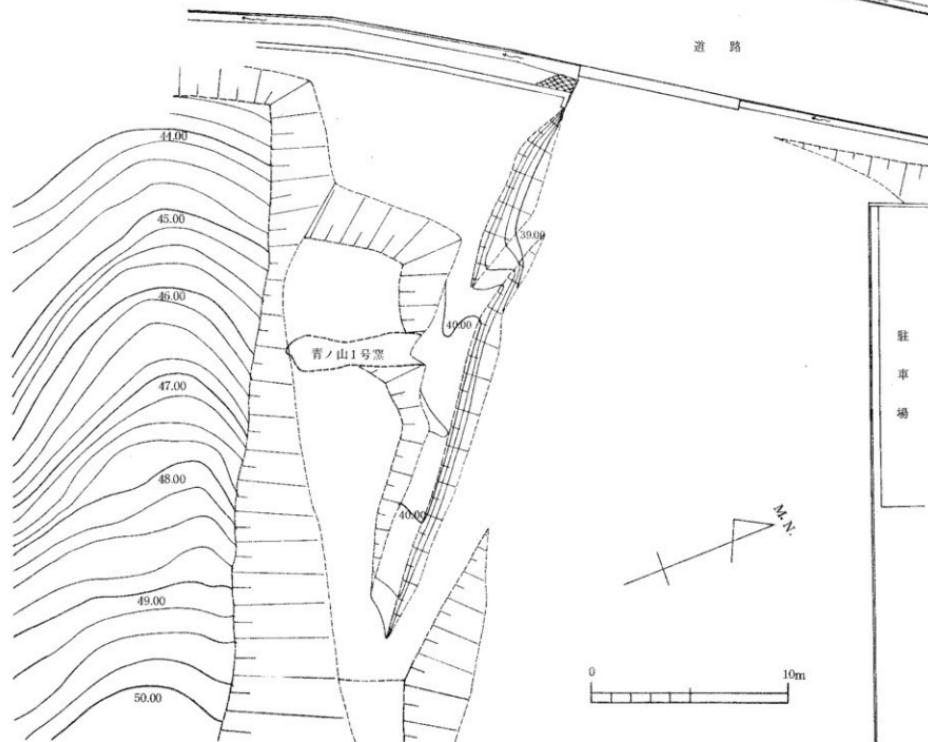
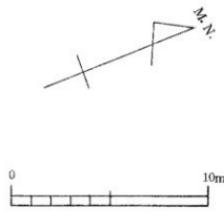
また、青ノ山1号窯の保存方法については6月29日に奈良文化財研究所の武田正昭・安原啓示両氏に現地視察をしていただき、後日具体的方法を提示していただくこととなり、10月31日に市教委・県教委立会の中で埋め戻され現在に至っている。

<注>

- ① 「香川県地質図説明書」内場地下工業KK及び「香川県木古窯跡発掘調査報告」
六車惠一・溝淵茂樹

道
路

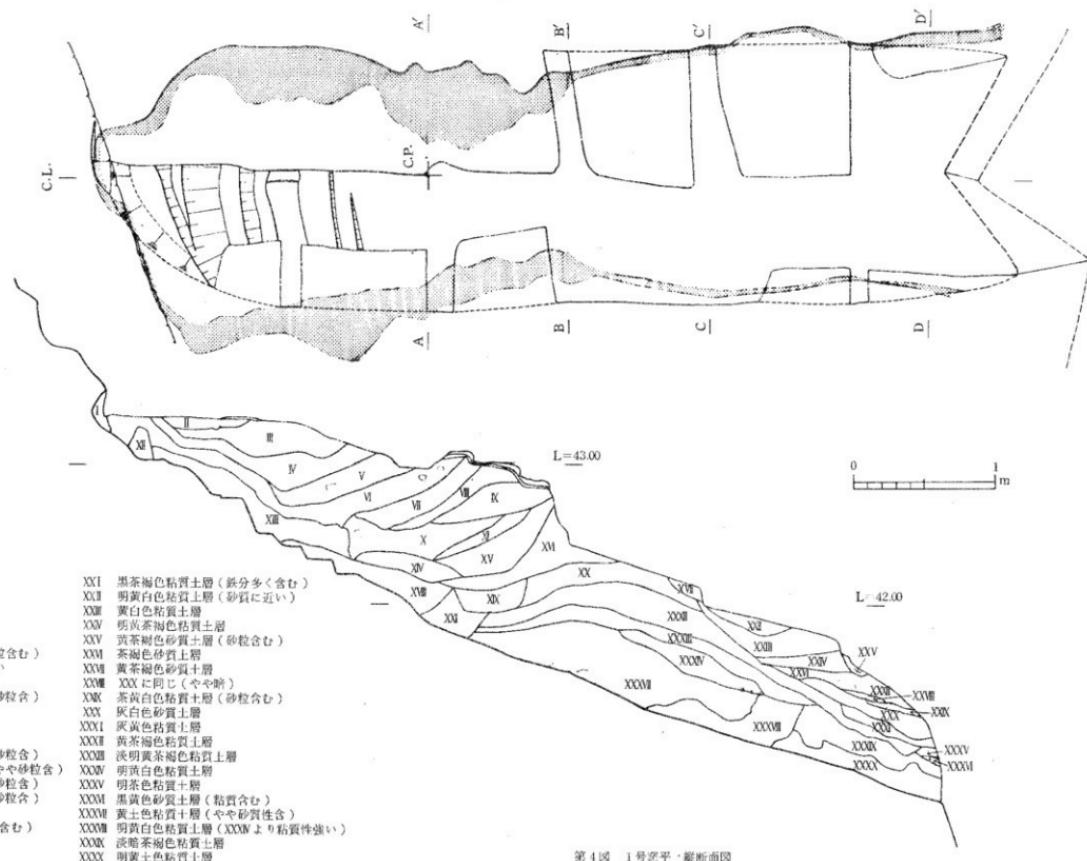
駐
車
場



第3図 青ノ山1号室地形測量図

- I 黄灰色粘質土層
 II 明黄土色粘質土層
 III 暗黄土色粘質土層
 IV 淡黄土色粘質土層
 V 淡茶灰土色砂質土層
 VI 茶褐色粘質土層(砂粒含む)
 VII 雄よりさらに白っぽい
 VIII 淡黄土色粘質土層
 IX 淡黄土色粘質土層
 X 明黄白色粘質土層(砂粒含む)
 XI XVより白っぽい
 XII XVより白色多い
 XIII 茶灰色ベイラン土層
 XIV 暗茶褐色粘質土層(砂粒含む)
 XV 暗黄白色粘質土層(やや砂粒含む)
 XVI 淡黄茶色粘質土層(砂粒含む)
 XVII 淡灰白色粘質土層(砂粒含む)
 XVIII 黄色粘質土層
 XVII XVと同様(粘質多く含む)
 XX XVより黄っぽい
 XXI 黑灰色土層

- XXII 明黄色粘質土層(砂質に近い)
 XXIII 黄白色粘質土層
 XXIV 男川茶褐色粘質土層
 XXV 黄茶褐色粘質土層(砂粒含む)
 XXVI 茶褐色砂質土層
 XXVII 黄茶褐色砂質土層
 XXVIII XXXに同じ(やや幹)
 XXIX 黄茶白色粘質土層(砂粒含む)
 XXX 黑白色砂質土層
 XXXI 黑黃色粘質土層
 XXXII 黄茶褐色粘質土層
 XXXIII 淡明黄色茶褐色粘質土層
 XXXIV 明黄色粘質土層
 XXXV 明灰色粘質土層
 XXXVI 黑黃色砂質土層(粘質含む)
 XXXVII 黄土色粘質土層(やや砂質性合)
 XXXVIII 明黄色粘質土層(XXXVIIより粘質性強い)
 XXXIX 淡灰茶褐色粘質土層
 XXXX 明黄土色粘質土層

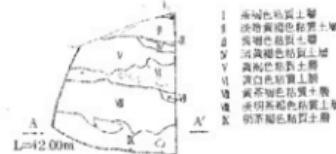


第4図 1号窪平・縦断面図

2 主体部

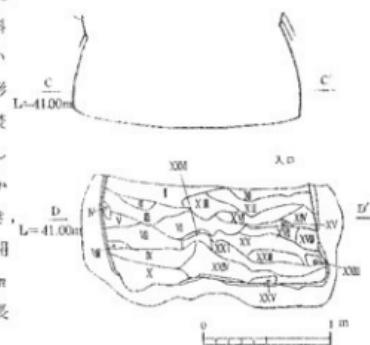
主体の規模は残存部分のみで主軸長6.7m、最大巾2.0m、土軸方向S-2°-W、標高は40.7m～43.4mを測る。全地下式無段發り窯(容積)である。

残存部とはほとんどが焼成部であり本来の主体の全長は約9～10m程度と推定する。



① 焚口・燃焼部

残存部分の最下部でお床面が15°の傾斜を示していること、この傾斜が焼成部中央より変換点もなく続いていること、残存部最下部の平面形がやや狭くなりつつあることから焚口、燃焼部は削平工事により欠失したと考える。残存の焼成部の規模からして、あと1m弱の焼成部に続き、床面傾斜がよりゆるやかで、やや開口氣味の燃焼部・焚口、とさらに2m前後の窓体が推定され、本来の全長は約9～10mとなる。



第5図 1号窯横断面図

I	赤褐色砂質土層(砂質帶)
II	赤褐色粘土層
III	黄褐色砂質土層(砂質帶)
IV	赤褐色燒化灰質土層(CO ₂ 上同)
V	灰黑色砂質土層
VI	灰褐色砂質土層
VII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
VIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
IX	灰黑色砂質土層(砂質帶)
X	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XI	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIV	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XV	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVI	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIX	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XI	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIV	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XV	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVI	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIX	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XI	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIV	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XV	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVI	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIX	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XI	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIV	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XV	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVI	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XVIII	灰黑色砂質土層(砂質帶)
XIX	灰黑色砂質土層(砂質帶)

② 焼成部

残存部のすべてが焼成部にあたり、長さ6.7m、煙道に近い側 $\frac{1}{3}$ の箇所で最大巾2.0m、他は約1.8m巾。床面の傾斜角は奥壁に近づくにつれ急になり、最下部で15°、中央部で19°、最上部で30°を測る。煙道に近い $\frac{1}{3}$ の床面は不規則な階段状で急な傾斜面にも土器を並べ易くしたと考える。これを有段と称するには

規模、構造ともに中途半端で、土器類を並べられぬ程の狭い段もある。最下部の傾斜の具合等から本窯の焼成部はあと1m弱はあったと推測される。障壁は認められず、天井は中央部西側が最も残存状況が良く、ほぼ主軸線に届く。これより主軸線に直交する断面を復元すると窓内の高さは最も高いところで1.3m程になる。主軸線の部分がやや深いゆるやかな曲面の床で壁面と天井面とで半円形を描いている。

床面、壁面、天井面のすべては1面の花崗岩より成る。粘土を塗った形跡も修復した痕跡も皆無である（香川大学教授坂東祐司、助教授谷山龍氏の窯壁片鑑定による。別掲）。最も温度の高い還元焰を受けた天井部窯壁の表面はアメ状に溶け、ガラス風の光沢さえある暗緑青色で、壁面は緑青色、床面は土器を並べたためか緑青色と赤褐色の斑を呈していた。崩壊した壁や露出した壁を観る限り緑青色の厚さは約5cm、その外側に1.0～1.5cmの赤褐色化した地山が続き、さらに外側は周辺の地山と何ら変わることろがない。しかし、東側壁の地山は粘質性の硬い、西側壁の地山は同じく粘質性のやや柔かい黒雲母花崗岩である。「千年位では地山の硬度は全く変化していないだろう。」（前述坂東氏談）とすると、本窯の構築にあたり、強固かつ工事可能な、地山の硬度の変換点を選んだと思われる。

窓内に充満していた土砂は土層図に示す様に、煙道部からの流れ込みや天井部の崩れの繰り返しで埋没したと理解される。土層はほとんどが粘土質土層で天井部の窓壁は床面直上から最上部層にまで検出され、崩壊が徐々に進行したことを裏付ける。最も早く崩れたのは中央部と言える。

④ 奥壁、煙道部

奥壁にあたる部分は直径50cm程の凹みで、立ち上がりよりも無く煙道に続いていたらしい。削平前の地形から推定すると煙道の高さは2m強で、傾斜角度は不明である。

3 遺物の出土状況

本窯にかかる出土遺物は、窓としては異常に少ない。窓外の遺物の宝庫である灰原及び窓内の遺物が流されて堆積していたであろう前庭、焚き口付近が乾地工事により消失したからである。

窓体の出土遺物はおよそ5個体分の須恵器片18片で、すべて床面より5～20cm上から出土した。発掘調査中に窓周辺の耕土より表探した4片と窓内の1片はほとんど接合でき窓の口縁の一部を形成し、接合できない破片も含めて本来1個体であったと言える。他に、焼け歪みの生じた宝珠つまみを有する杯蓋部1片、脚付き長頸壺の胴部1片、接合できる生ま焼けの黄茶褐色の壺底部2片、先の壺よりやや小型の壺の、恐らく1個体と思われる胴部3片である。どれも陶邑古窯跡群（大阪府）のⅢ期の前期に比定される須恵器で、金沢氏の表探遺物から判断する操業時期の最後のころのものと同時期となる。

本窯は操業中に崩壊したものではない。製品のみを燃出した後に、焼成中の破片となったものが多くそのまま遺棄されたろうが、破片程度なら吐き出してしまう雨水や土砂流により焼成部より下方に運ばれたことだろう。窓内遺物の出土地点も流入物の堆積しやすい奥壁近くの階段状の部分と最も傾斜角度の小さいところである。従って、これら18片の出土遺物のうち原位置を保っていたと思われるものは1片もない。

窓辺を削平した土砂はダンプカーにより数ヶ所の埋め立て地へ運ばれ既に地下に没したが、積み残された僅かの土砂が墓地公園の駐車場の隣に寄せられていた。窓体外の出土遺物は金沢氏がここで表揚したものである。須恵器片41片と窓盤片15片がそれである。器種は台付壺の台、杯身、杯蓋、甕で、焼成中に土器どうしがくついたのもあり陶邑古窯跡群のⅡ期の後期、Ⅲ期の前期・中期を含む。窓盤は、窓内出土のものより小さいものが多く表面はアメ状に溶けガラス風の光沢もあるが、地割れ状に崩れたものが多い。残存している床面・側面・大井面のどれと比しても光沢は鈍く、つやが無く、ひび割れが目立つ。操業中に天井部だけは僅かに剥落して灰原にかき出されたかも知れない。

4 遺 物

青ノ山1号窯からの出土遺物は、時期の判定できるものとしては第6図-4・5・6・7・15の5点を数えるのみで、この他には壺胴部の破片が20片程出土しているのみである。

この他の遺物は、灰原内に遺存していたものと判断したうえで、これらのものを一括して述べてみたい。

杯蓋1-7は、1、2-5、6-7に分類することができる。1と2-5の差異は口径の大小を主たる差と考えている。

6・7は擬宝珠様のつまみを有し、杯蓋にかえりのつく逆転期以後の所産である。ただ、6と7を比較した場合、擬宝珠様のつまみの大きさ、それに比例する口径の大小から、異なる時期のものとも考えられる。

杯身8-12は、8-9、10-11、12に分類できよう。8-9と10-11の差は、口径の大小とこれと比例した深さ及びかえりがあげられよう。かえりは、8-9が内溝したのち上方に立ち上がるのに対して、10-11はその長さも短く、不安定な形へと変化している。

12は、杯身にかえりがなくなった以後のものである。

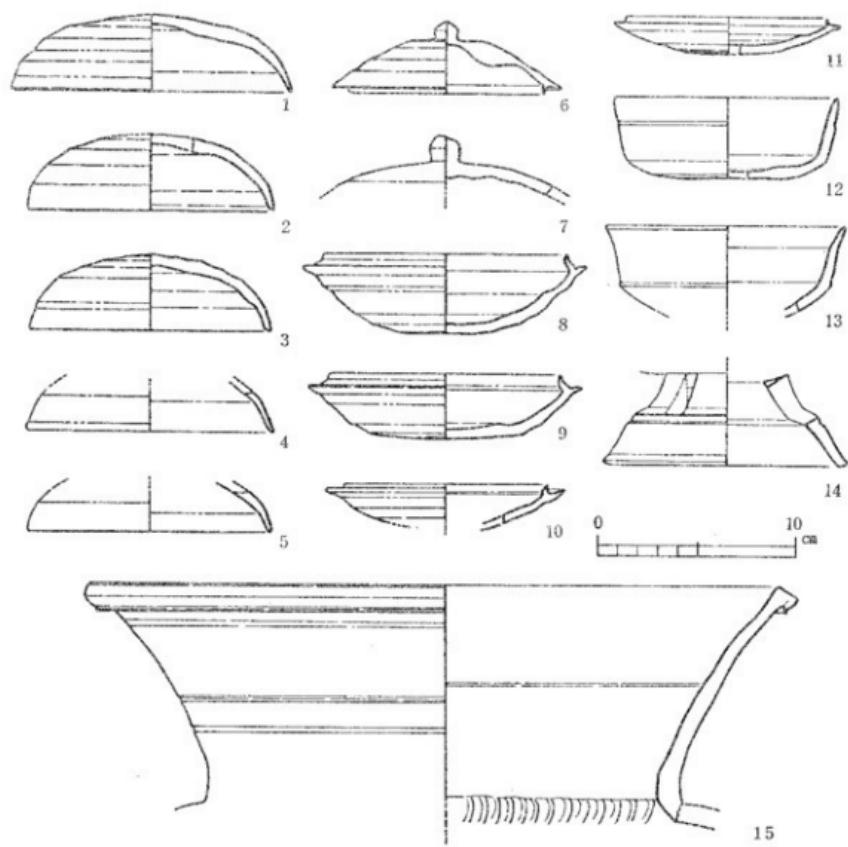
杯蓋、杯身の対応関係は、1と8-9、2-5と10-11、6-7と12と考えられる。12は平底で安定した器形であり、6よりも7の段階の所産と考えられる。

13は高杯の杯部と考えているが、類例が見あたらず、どの段階のものになるかは不明である。14の脚台は、台付壺の脚台と考えられる。

15の甕は、6の杯蓋と同様に、窓内に遺存していた点からすると、この時期のものとするか、7の杯蓋の段階のものとするかであろう。

遺物の遺存度が悪かったこともあり、器種及び遺物の特徴等について、あまり明確にしえなかつた。

今回図化できなかった破片類のうちには、器台の杯部底面の破片もあり、青ノ山古墳群に副葬されている須恵器の多くが、この窓からの供給であることは推測に難くない。



第6図 青ノ山1号墳出土須恵器実測図

第2表 青ノ山1号窯造物観察表

掲図番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
第6図-1	杯 蓋	口径13.6 器高 3.9	口縁部は、下外方に下り、端部は鋭い。	ヘラケズリ強 ヘラ切りの痕跡あり。 他回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 色調 灰黒色 胎土 やや粗い。 焼成 良好 (表採)
第6図-2	杯 蓋	口径12.0 残存高3.9	口縁部は、下外方に下り、端部は内面で傾斜して鋭い。	ヘラケズリ強 他回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 色調 吉灰黒色 胎土 密(砂粒を含む) 焼成 良好 (表採)
第6図-3	杯 蓋	口径11.8 器高 3.8	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。	ヘラケズリ強 ヘラ切りの痕跡あり。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 色調 青灰黒色 胎土 やや粗い。 焼成 良好 (表採)
第6図-4	杯 蓋	口径12.0	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。	回転ナデ調整	色調 茶灰褐色 胎土 やや粗い 焼成 やや不良 (表採)
第6図-5	杯 蓋	口径11.8	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。	回転ナデ調整	色調 灰黒色 胎土 やや粗い 焼成 良好 (表採)
第6図-6	杯 蓋	口径 9.6 器高 3.7	口縁部は、外下方に下り、端部は丸く、内傾するかえりを有し、端部は鋭い。 かえりは0.5弱。天井部は、平らに近く、中央には擬宝珠様のつまみを付す。	ヘラケズリ強 他は回転ナデ調整	ロクロ回転、右方向。 色調 青灰黒色 胎土 密(やや砂粒を含む) 焼成 不良 (窯内)
第6図-7	杯 蓋		天井部は、丸味をもち、中央には擬宝珠様のつまみを有す。	回転ナデ調整	色調 茶灰褐色 胎土 やや粗い 焼成 やや不良 (表採)

挿図番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
第6図-8	杯身	口径 12.0 器高 4.0	たちあがりは、内傾した後、ほぼ直立してのび、端部は鋭い。たちあがり高、1.0未満。受部は水平にのび、端部は鋭い。受部の基部に、凹線様のものあり。	ヘラケズリ $\frac{1}{3}$ 強 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 色調 茶灰白色 胎土 粗い(砂粒を多く含む) 焼成 不良 (表採)
第6図-9	杯身	口径 11.4 器高 3.2	たちあがりは、内傾した後、ほぼ直立してのび、端部は鋭い。たちあがり高、1.0弱。受部は水平にのび、端部は鋭い。	ヘラケズリ $\frac{1}{3}$ 程 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 色調 青灰黒色 胎土 やや粗い(砂粒を多く含む) 焼成 良好 (表採)
第6図-10	杯身	口径 10.0	たちあがりは、ほぼ直立してのび、端部は鋭い。たちあがり高0.5程。受部は外上方にのび、端部は鋭い。	ヘラケズリ $\frac{2}{3}$ 程 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 色調 青灰黒色 胎土 密 焼成 良好 (表採)
第6図-11	杯身	口径 10.2 残存高 1.9	たちあがりは、ほぼ直立してのび、端部は鋭い。たちあがり高、0.3程。受部は水平にのび、端部は鋭い。	ヘラケズリ底部のみ 他は回転ナデ調整。	色調 茶灰褐色 胎土 やや粗い 焼成 良好 (表採)
第6図-12	杯身	口径 11.2 残存高 4.1	体部、口縁部は、上外方にのび、端部は鋭い。底部は、平ら。口縁下に凹線文を施す。	ヘラケズリ底部のみ 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、右方向。 色調 青灰色 胎土 密 焼成 良好 一部自然釉が見られる。 (表採)
第6図-13	高杯	口径 12.7	口縁部は、上外方に、外湾ぎみにのび、端部は丸い。	杯部下半はヘラケズリ、他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 色調 灰黑色 胎土 密 焼成 良好 (表採)
第6図-14	脚台	底径 11.2 残存高 4.6	基部より外下方に二段に下る。端部は外上方に傾斜を持つが平坦。上段に直方形の透し孔を三孔持つ。	回転ナデ調整。	色調 灰白色 胎土 密(砂粒を多く含む) 焼成 良好 (表採)
第6図-15	甕	口径 34.2	口縁部は、ゆるやかに外反し、端部を折り曲げて肥厚させている。	回転ナデ調整 口縁部外面にクシ目調整。	色調 黒灰色 胎土 密 焼成 良好 自然釉が見られる。 (表採)

5 小 結

青ノ山1号窯は全地下式無段竈り窯（寄窯）である。

残存部分は焼成部と奥壁のみの6.7mであるが、操業時は全長9~10mあり規模としては標準である。

地山の黒雲母花崗岩を掘削したもので張り壁も修復の痕跡も皆無で、床面・側面・天井面とともに地山が高熱を受けて強固になった壁一枚である^{注1}。

灰原の遺物と考えられる金沢氏の表採遺物を合わせると陶邑古窯跡群のⅡ期の⑤・⑥及びⅢ期の①・②の杯身・杯蓋が含まれている。Ⅱ期の⑤にあてはまるものとして伝灰原の1・8・9があげられる。口径は14cm前後で杯蓋は天井部と口縁部の間に稜がない。杯身は立ち上がりが短くやや内傾し端部は段をなさない。器形はともにやや扁平な感じを与える。Ⅲ期の⑥は伝灰原の2・3・4・5・10・11で杯蓋、杯身ともに口径は12cm前後と小形化し立ち上がりは消滅の傾向が如実に現われている。Ⅲ期の①としては窯内より出土した宝珠つまみを有する杯蓋で口径は12cm未満。杯蓋の内面に比較的長いかえりが出現する。Ⅲ期の②にあたるものに伝灰原12があり、この杯身は高台を伴う一歩手前と言える。平底で口縁部が直立に近くやや外反気味である。以上より、本窯の操業時期は6世紀末より7世紀前半と推定する。

構造から言えば、県下で100基を超える古窯のうち唯一の須恵器寄窯（全地下式のみに注目すれば奈良時代の坂出市府中町前谷の国分寺瓦窯がある。）である。

操業時期から言えば、県下で最も古いグループにはいる。渡部明夫氏によると、瀬戸の初期須恵器生産は6世紀後半～7世紀初めにかけて開始されている。6世紀後半の奥白方窯跡（仲多度郡多度津町）、6世紀末の辻窯跡群（三豊郡大野原町・山本町）、6世紀末から7世紀後半の山谷三郎池窯跡（高松市三谷町）、7世紀初めから奈良前期の末窯跡（大川郡志度町、7世紀前半から平安時代末の十瓶山山麓の窯跡群（綾歌郡綾南町）がそれである。

現時点で青ノ山1号窯より半径1km以内に須恵器窯は1基も発見されていない。だから、十瓶山窯跡群の如く70基を超す須恵器窯の集中にみられるような窯業地帯の1基と同じ性格のものではない。単に青ノ山古墳群の祭祀用のためだけとは断言できぬが、それを本来の目的として工人を支配し窯を築造させた首長権力があったことは十分考えられる。巨石墳の所在する付近にはほとんど例外なく須恵器の窯跡が存在するという森浩一氏の指摘^{注2}を思うとき、青ノ山7号墳を巨石墳とすれば青ノ山1号窯はまさにその例証と言える^{注3}。それはまた在地首長層による独立支配の證であるのだが、結局本窯は後の操業を見ることなく地中に遺棄されてしまった。

青ノ山6号墳より出土した須恵器の杯蓋、杯身は陶邑のⅡ期の④に類似し6世紀後半に比定される。本窯の出土遺物にはこの時期のものは含まれていない。それは、遺物が消失しただけのことなのか、それとも他に6世紀後半には操業していた窯が存在するのか。同様に7世紀中期、後半の出土遺物も無いが、未発見なのか、それとも奈良時代以後官窯的性格を持ったとされる十瓶山山麓の窯業地帯に押されて自然消滅への道をたどったのか。これらの疑問もいずれ今後の調査研究によって解明されていくに違いない。

〔注〕1 「須恵器」日本の原始美術④ 原口正三によれば地山を掘削したままで張り壁もせず操業していた例は陶邑古窯跡群にある。

2 「南海道の古代窯業遺跡とその問題」（日本歴史・237号）森 浩一

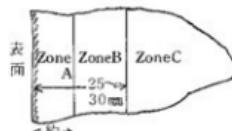
3 県下の他の例として大山真充氏が3グループ18基の巨石墳について述べている「瀬戸の国造について」（香川史学8号）

付 — 背ノ山1号窯の天井部の窯壁の岩石について —

香川大学教育学部 坂東祐司 教授
谷山 慶助 教授

はじめに

香川県文化行政課より依頼された背ノ山1号窯の天井部の岩石について以下のように鑑定し報告



する。便宜上、窯壁表面より3つのZone A・B・Cに分け、肉眼・顕微鏡・X線による観察を行ない、最後にまとめの一文をなした。

1) 肉眼的観察

表面は黒色の光沢をしている。中に斑状の白い石英及び溶融長石が点在する。内部の切断面は25~30mm (Zone A & B) の優黑色の部分と、赤鉄鉱の生じて赤褐色の部分 (Zone C) に分けられる。しかし、表面より内部C帯に至るまで、岩石構造の顯著な違いは認められない。

2) 顕微鏡観察

表面より内部C帯まで、岩石の組織の変化は連続的で黒雲母花崗岩の変質したものである。

A帯：長石はガラス化している。内部に小さな気泡 (0.1mm以下) が多数生じているが透明である。石英は表面近くになるにしたがい小さく割れたものが多い。石英及び溶融長石の間をうめる部分は有色で不透明である。

B帯：長石は内部に小さな気泡が生じている部分があるが、大部分は白濁を生じている。また、長石一個体内部に部分的にガラス化していない部分を残している。石英・長石の間の部分は不透明である。しかし、黒雲母の組織が残っている部分もある。

C帯：赤褐色味を帯びている部分で、長石は風化してやわらかく、長石等のガラス化は生じていない部分と思われる。

3) 粉末X線による観察

A帯：長石はすべてガラス化している。

石英は溶融していない。

石英の回折線のみが検出される。

B帯：石英及びカリ長石（微斜長石）

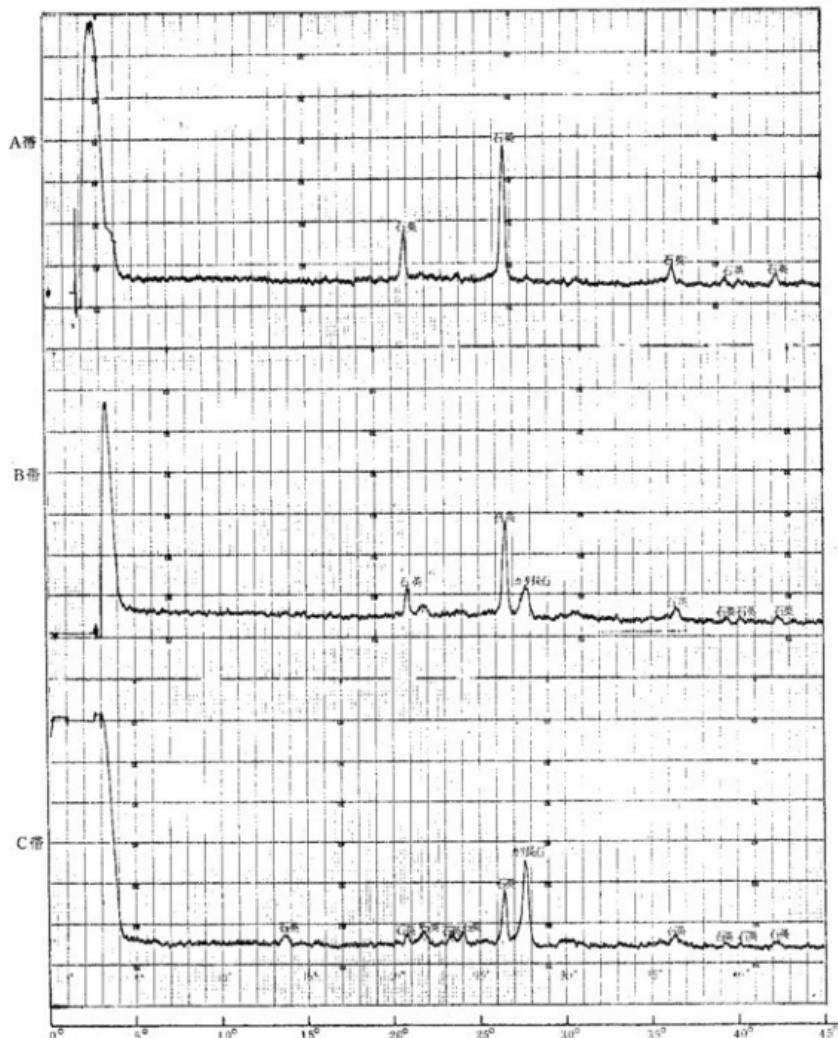
C帯：B帯と同様であるが、カリ長石が多くなる。

4) まとめ

- 以上より
1. 当岩石は、黒雲母花崗岩で表面に粘土層は見られない。
 2. 長石の完全に溶融している層の厚さは表面より13mm前後で、25~30mmの深さまでは部分的に溶融している。
 3. 表面の温度についてはカリ長石の溶融実験データーが不足している為、不明である。ただ、石英より1670°Cより低く、長石より970°Cより高い温度であることがわかる。

以下にX線実験データー

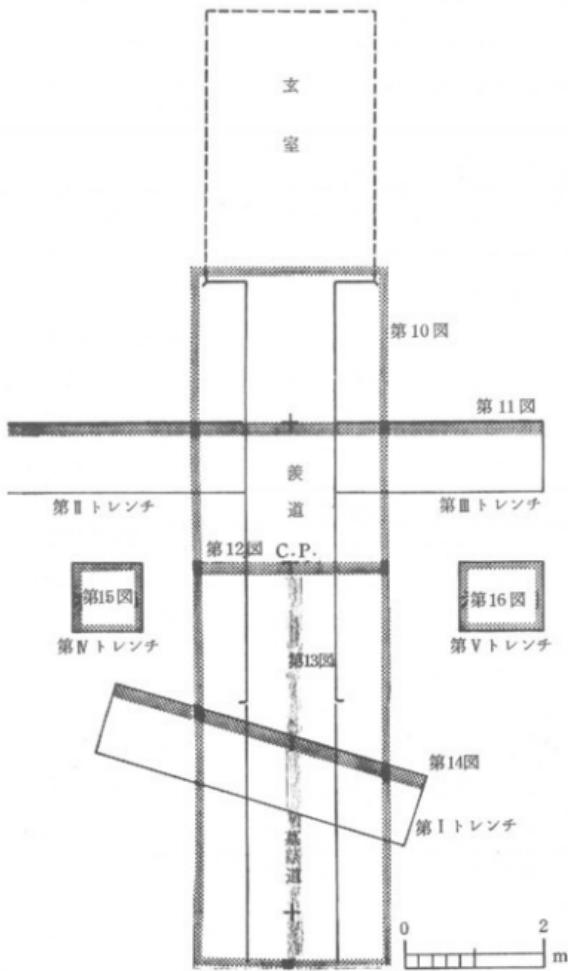
(X線回折条件管電圧電流
30 KV・10 mA)



第7図 青ノ山1号窯窯壁片試料の粉末X線回折パターン

IV 青ノ山7号墳

1 位置と現状



第8図 青ノ山7号墳掲載実測図位置図

本墳（通称竜塚）は丸亀市と宇多津町とにまたがって聳えるピュート状独立峰、青ノ山頂部から南に派生する尾根筋のほぼ先端部敵高地、標高50mに所在し、横穴式石室が略南西に開口する。

本墳の周辺部は、土地造成のため南東に派生する尾根筋線に沿って北東から南西にかけて大きく削られ断崖と化している。その崖面には、ブルドーザやヤンボ等重機の鋭い爪跡が生きしく残っている。その尾根先端部敵高地上に玄室部を欠損した青ノ山7号墳が渋道部を残して所在している。破壊された玄室の側壁石や天井石が土砂採取場に散在している。また、墳丘部も削平され、渋道部西側壁石天端部が露呈していた。

2 墳丘

青ノ山7号墳の墳丘封土は、前述のように土地造成工事のため削平され現状では墓道部と墓道を残すのみであり、その墓道部の側石天端部が露出している。

本墳の所在する周辺の尾根南西側緩斜面は開墾して畑や果樹園となっているが急斜面部は雑木が自生している。

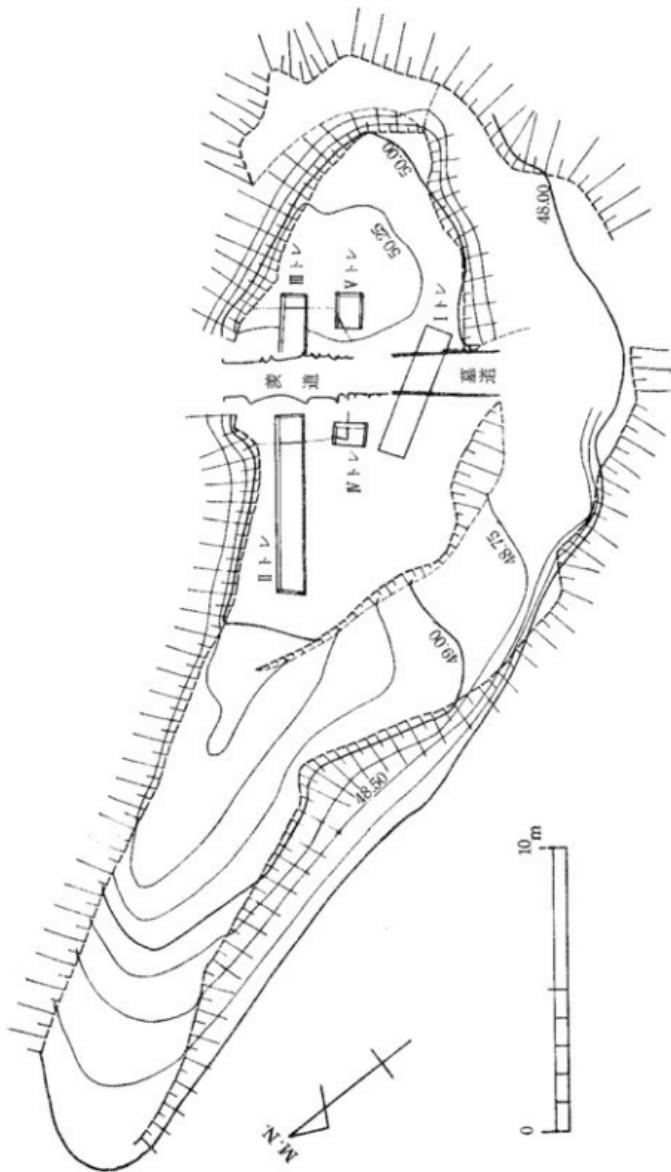
調査は、墓道の主軸に直交して5ヶ所トレンチを設定して実施し、若干の概要を得た。

墳丘について本墳に閑通して試掘した第1～第5までの各トレンチから観察してみると盛土はすでに削平してしまったのか認められなかった。木槧構築に際しては、見晴しの良好な微高地に等高線に直交して地山層まで掘り込んで平坦にし、基底石の裏込め固定を行い背面の隙間に小石で充填しながら掘り方を埋めている。第2～第5トレンチの上層を観察すると10～15層ほど花崗土と黒茶褐色土が薄い層序を呈しているのが確認できる。また、埋土は非常に固いしまりをみせている。

さて、墳丘の規模であるが、玄室の長さ3.8m～3.9m（青ノ山6号墳調査報告より）、墓道部6.0m、墓道3.5mを計測する。この時期の円墳構築法を考慮に入れて考えると墳丘は径2.5m～3.0mの数値が考えられる。

青ノ山6号墳調査報告書（1977）によると本墳の径2.5mとなっている、径2.5mの円墳はこの時期（6世紀後半～6世紀末）の同規模の横穴式石室を有する古墳としては県下で標準的と考えられる。ただ、墓道が墳丘内に含まれていたのか、墳丘外にあったのか、また、墓道の一部が墳丘にかかっていたのかが問題である。上記のどの形式かによって墳丘の径が変化てくる。今回の調査ではどの形式かを断定するにはいたらなかった。

墳丘の外部施設としての外護列石や周塙等は確認できなかった。



第9図 青ノ山7号地地形測量図・レンチ位置図

3 埋葬施設

本墳の埋葬施設は、尾根後線の等高線に直交して地山層に掘り込んでいる。主軸はN—Eにとり、略南西に開口する両袖型横穴式石室である。

石室は昭和初期頃すでに開口しており、天井石もその頃から除去していたと言う。副葬品についても発掘待ちられており、床面まで完全に攪乱を受けている。さらに、前述のように玄室も欠落している現状から、調査は残された羨道部と墓道について行い、若干の概要を報告するにとどまらざるを得ない。

羨道部についてみると、羨道部はほぼ原形を保っていると考える。長さ6.0m、幅1.30～1.50m、高さ1.30m～1.50mの規模を有している。側壁は玄門部寄りの個所では両壁とも巨石を配しており、羨門部寄りには角石の乱積みとなっている。主石材の隙間は割石や花崗土と粘質土の混合したもので充填している。大半の石材は花崗岩の自然転石であるが、中には石材に調整を施したものもある。既して玄門部に近づく程巨石を配し丁寧に構築しているに対し、羨門部に近くなるに従ってやゝ乱雑な構築をしている。また、右側壁羨門部寄りは、地山整形をしてその上部に版築をし、さらに積石をして天端部の調整をはかけており、左側壁の羨門部寄りと共に玄門部附近に比べ構築法が特異の感を呈す。これは、追葬時に羨道を延長増構築したものか、埋葬時に二期工事として延長したものか断定できないが、いずれにしても他の類例を見ない構造となっている。持ち送り手法は、今回調査した羨道部には見られないが、詳細に観察すると延長構築した個所に若干の持ち送り工法が施されている。

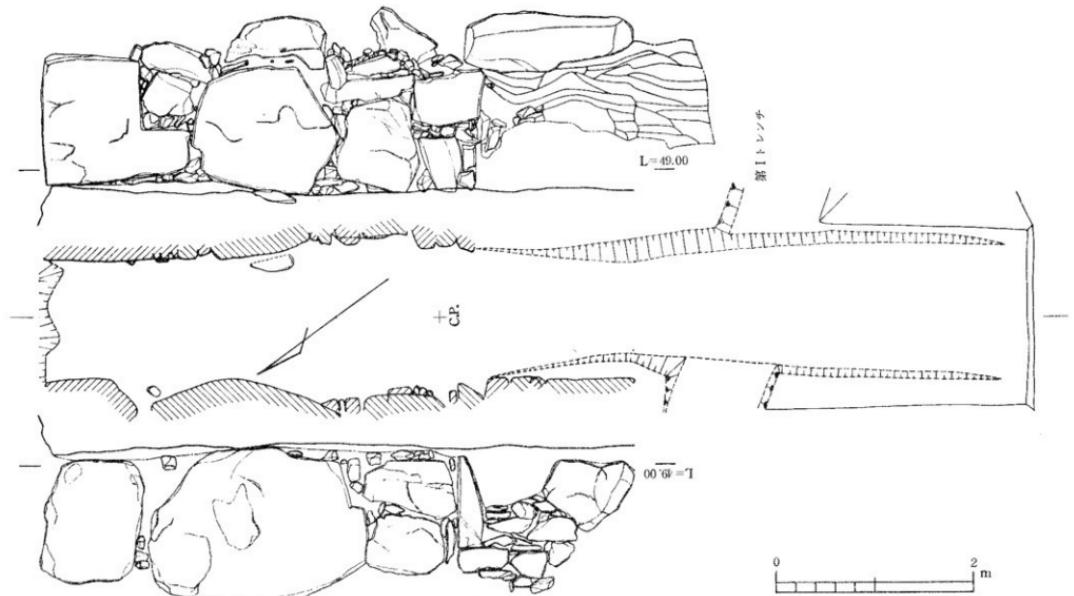
床面については、すでに全面にわたって後世の攪乱を受けており確認することは出来なかった。また、床面から出土遺物も左側壁基底石の個所より須恵器片が3点検出されただけである。床面の傾斜は側壁の基底石からみてほぼ水平であるが、墓道近くで若干のレベルダウンがみられる程度で、排水の機能をもたせるために意識的に傾きをつけたという程のものではない。

閉塞部は完全に旧状を保っていると判断する。ここも多くの古墳は石材によって閉塞しているが、本墳は、互層積み工法をした土積閉塞をしている。第1トレンチ土層断面から観察するところの閉塞は二時期実施されていることが確認された。これは追葬が行われたことを裏付けるものとして注目したい。

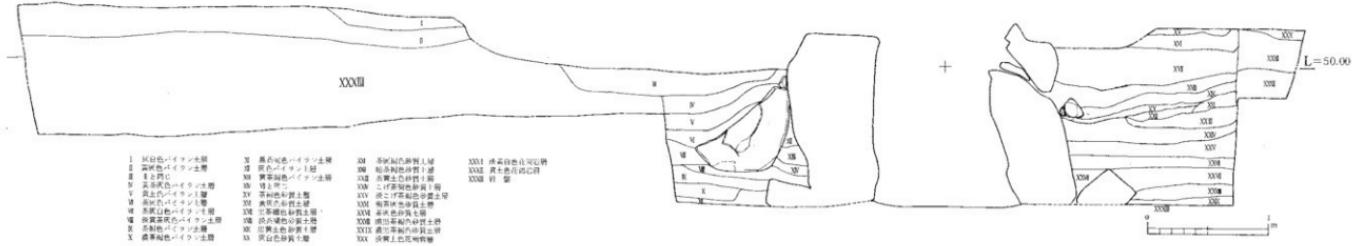
石室の掘り方とは、等高線に直交して花崗岩風化バイラン上層の地山層に1.40m～1.50m掘り込んでフラットに地山整形して、巨石は1石又は2石、他は3石から数石、基底石に上積みし、天端部を調整している。

側壁の背面については、全掘していないので全容は明らかでないが、第2～第5トレンチによって観察したところによると、控え積みは石材を用いており、裏込め後は花崗岩風化バイラン土に粘質土を混合し互層積みに版築しており、非常に固くしまっている。

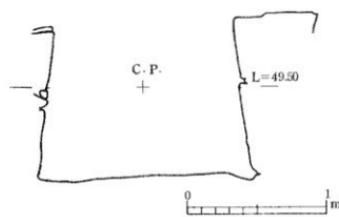
石室掘り方の平面プランは羨道部が長方形を呈しており、墓道がやゝ幅の狭い長方形をしており、羨道から墓道にいたる平面プランは羽子板形状を呈している。



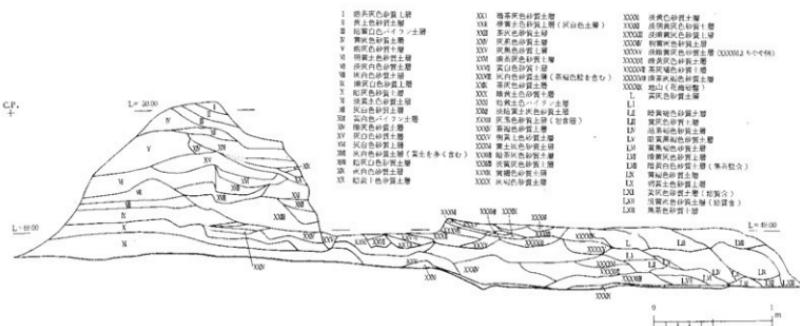
第10図 石室実測図



第11図 Ⅲ・Ⅳトレンチ北壁断面図

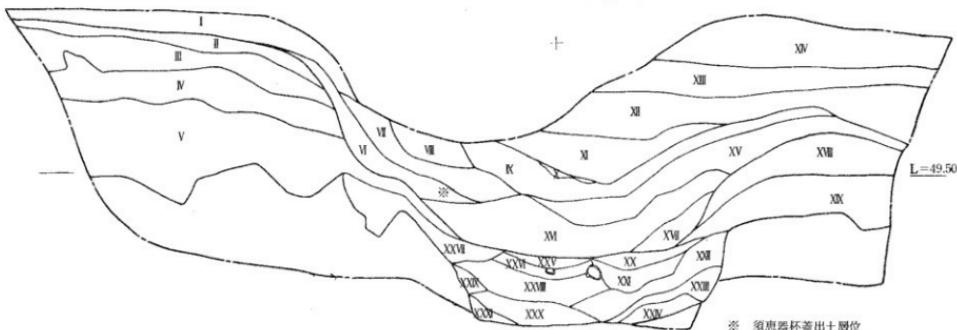


第12図 石室断面図

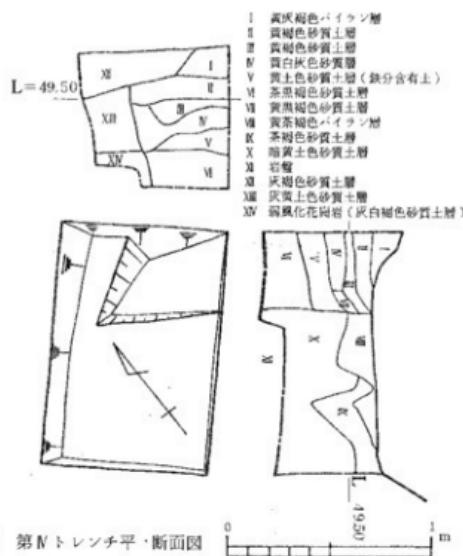


第13図 閉塞部、墓道断面図

I 淡黄灰色砂質土層	X 黄白色バイラン土層	XII 灰茶色砂質土層	XXX 淡茶褐色砂質土層(砂っぽい)
II 淡黄土色バイラン土層	XI 暗黄白色バイラン土層	XIII 黄灰色砂質土層(灰を含む)	
III 黄土色バイラン土層	XII 黄土色砂質土層	XIV 暗黄褐色砂質土層(精干)	
IV 暗黄土色バイラン土層	XV 暗黄土色砂質土層	XVII 淡茶褐色砂質土層(砂っぽい)	
V 明黄土色バイラン土層	XVI 晴茶灰色砂質土層	XVIII 明黄土色砂質土層(焦茶色粒を含む)	
VI 黄土色砂質土層(灰色まじり)	XVII 暗黄土色砂質土層(灰白色土含)	XIX 茶灰色砂質土層	
VII 黄土色バイラン土層	XVIII 黄土色砂質土層(茶褐色粒含)	XX 淡灰白色砂質土層(灰を含む)	
VIII 暗黄灰色砂質土層	XIX 明黄白色砂質土層	XXI 灰黑色砂質土層(砂っぽい)	
IX 晴黄土色砂質土層	XX 明黄土色砂質土層(精干)	XXII 淡灰茶色砂質土層(砂っぽい)	
X 灰白色砂質土層	XXIII 暗黄白色砂質土層(焦茶色粒)	XXIII 淡黄土色砂質土層	

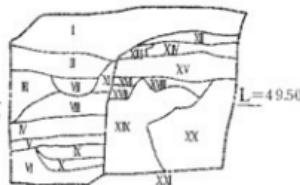


第14図 第1トレンチ北壁断面図

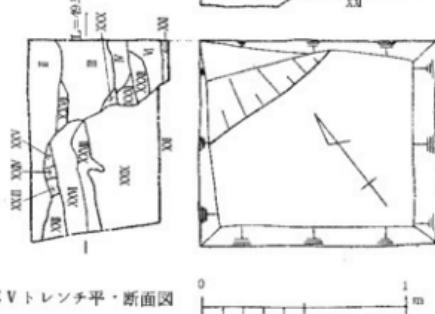


第15図 第Nトレンチ平・断面図

I	黄条褐色砂質土層
II	黄灰褐色砂質土層
III	黄灰褐色砂質土層
IV	茶褐色砂質土層
V	黄茶褐色砂質土層
VI	黄褐色砂質土層
VII	黄褐色砂質土層
VIII	黄褐色砂質土層
IX	黄褐色砂質土層
X	石發
XI	黄褐色砂質土層
XII	黄褐色砂質土層
XIII	弱風化花崗岩(灰白細色砂質土層)
XIV	明黃褐色土層
XV	黃白色土層
XVI	黄褐色砂質土層
XVII	黄褐色砂質土層
XVIII	谷 離
XIX	黄灰褐色土層
XX	明灰褐色土層
XXI	明灰黃土土層
XXII	明灰黃白色土層
XXIII	黑灰土土層
XXIV	黑灰黃白色土層
XXV	黑灰土土層
XXVI	黄褐色土層
XXVII	黄褐色土層
XXVIII	黑灰褐色土層
XXIX	黑灰褐色土層(粘質多少含)
XXX	黄茶褐色土層
XXXI	黄茶褐色土層
XXXII	黄茶褐色土層(鉄分含)
XXXIII	濃黃茶褐色土層



第16図 第Vトレンチ平・断面図



4 遺 物

出土遺物は、羨道・墓道埋土内から出土した須恵器の他、玄室内で採集された金環・土師器甕がある。

杯蓋 1・2 は、薄手で口縁部に特徴が見られるが、類例を見ない。

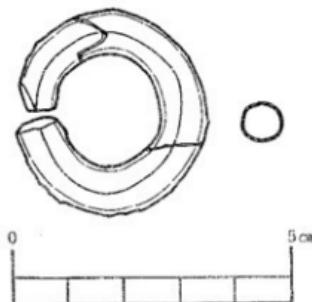
杯身 3・4 は、受部が体部の延長上に伸び、立ちあがり部も内傾して短く、陶邑編年Ⅱ期 6 段階に相当する資料である。1・2 もほぼ同様の時期と考えてよかろう。

5 は有蓋高杯で、長脚二段透しのものである。杯部の特徴は、立ちあがり部が内傾してのち直立し、まだ退化していないことであるから、Ⅱ-5 段階に比定できよう。墓道埋土中の出土層位も、4 よりも下位であった。

6 も同様の器形と考えており、ほぼ同時期と考えてよかろう。

7・8 の脚台は、類例に乏しく時期の判定が困難である。

9 は提瓶の把手であるが、この把手を有する提瓶の時期は、現時点では 7 号墳との間に差があると考えられ、混入とも考えられる。



第18図 7号墳出土金環実測図
出土金環は、断面径 7.5 mm の円形に近い。間隙は 1 mm を計る。

出土遺物からすると、11 の段階・5 の段階・3-4 の段階が考えられ、6 世紀後半の築造、6 世紀末の追葬が考えられよう。

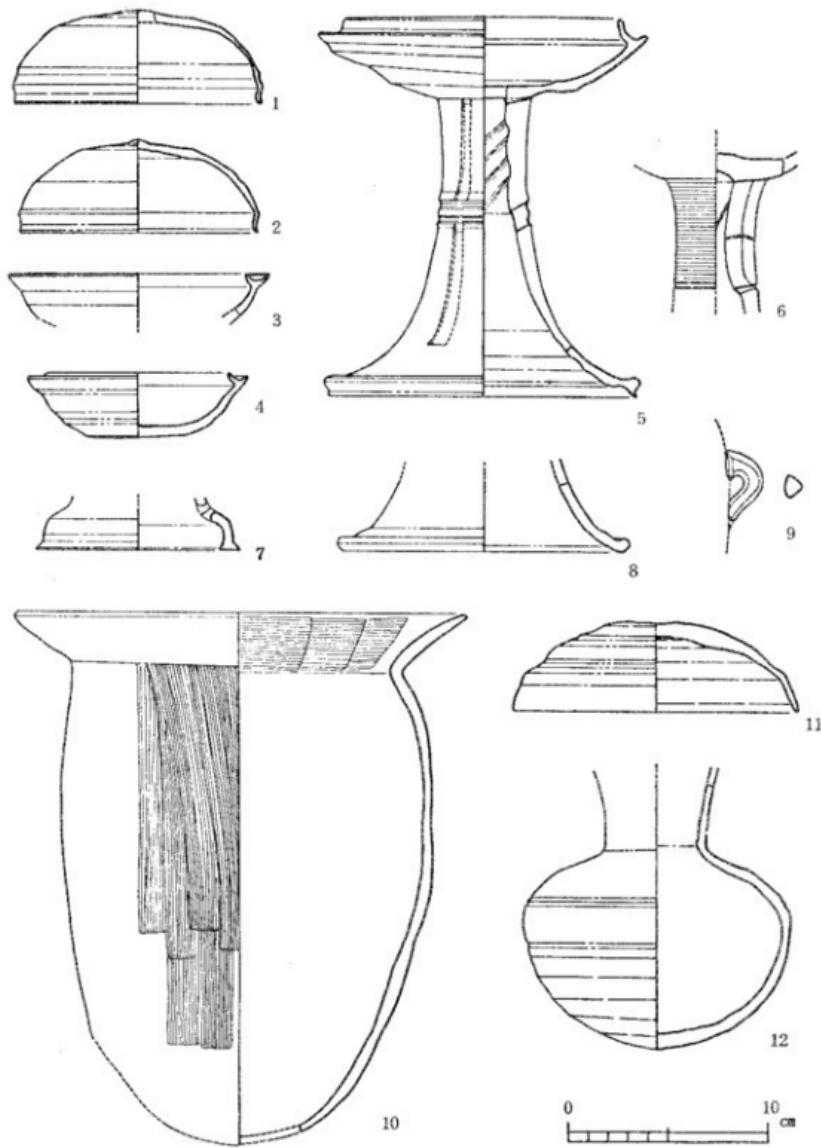
10 の土師器甕は、外面を縱方向の刷毛目、口縁部内側には断続的な横方向の刷毛目が施されている。類例に乏しく時期を限定することは困難である。

11・12 は、7 号墳からの出土と伝えられており、参考に掲載した。

11 の杯蓋は、口径・器高とも最大化した時点のもので、Ⅱ-4 段階と考えられる。

12 の長頸甕は、口縁部を欠損しているが、体部最大径が肩部にあることから、11 とほぼ同様の年代を考えてもよかろう。

第18図は、10 と同時に玄室内で採集されたもので、径 3.6 cm を計る金環である。地は銅で金銅を張っている。断面径は 7.5 mm で円形に近い。間隙は 1 mm を計る。



第 17 図 7 号墳出土須恵器・土師器実測図

第3表 青ノ山7号墳遺物観察表

挿図番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
第17図-1	杯蓋	口径 12.3 残存高 4.8	口縁部は内湾して下外方に下り、端部は丸い。 明確な稜を成す。 器壁は薄い。	天井部のみ回転ヘラ ケズリ調整。 他は回転ナゲ調整。	色調 明灰灰褐色 胎土 密 焼成 やや不良 (墓道埋土中)
第17図-2	杯蓋	口径 11.8 器高 4.7	口縁部は内湾して下外方に下り、端部は丸い。 明確な稜を成す。 器壁は薄い。	天井部のみ回転ヘラ ケズリ調整。 他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転。左方向。 色調 青灰白色 胎土 密 焼成 やや不良 (閉塞土中)
第17図-3	杯身	口径 13.1	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 たちあがり高、1.0未溝。受部は、外上方にのび、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	色調 暗青灰色 胎土 やや密(砂粒を多く含む) 焼成 良 (墓道内)
第17図-4	杯身	口径 9.0 器高 3.4	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 たちあがり高、0.5程。受部は、外上方にのび、端部は丸い。	回転ナゲ調整。	ロクロ回転。左方向。 色調 青灰黒色 胎土 やや密(砂粒を含む) 焼成 良好 (墓道埋土中)
第17図-5	高杯	口径 13.5 器高 19.2	杯部 たちあがりは、内傾した後、ほぼ直立てのび、端部は丸い。 たちあがり高、1.0強。受部は外上方にのび、端部は丸い。 脚部 基部より、外反して下り、裾部で屈曲して、内湾する。端部は鋭い。中位に2本の凹線を有す。 透し孔、2段3孔。	回転ナゲ調整。	色調 暗青灰色 胎土 密(砂粒を若干含む) 焼成 良好 (墓道埋土中)

挿図番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
第17図-6	高杯	残存高 7.2	脚部上段 カキ目が見られる。 透し孔、3孔。 二度ヘラを入れて いる。	杯部内底、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	色調 暗青灰色 胎土 密 焼成 良好 (墓道埋土中)
第17図-7	脚台	底径 10.2 残存高 2.2	腰部で屈曲して、下 方にのびる。 端部は括張して平坦。 円孔を有す。	回転ナデ調整。	色調 暗黄灰色 胎土 密(砂粒を多 く含む) 焼成 良好 (墓道埋土中)
第17図-8	脚台	底径 13.9	基部より、外反して 下り、腰部が上外方 に屈曲する。 端部は内傾した平坦 面をなす。	回転ナデ調整。	色調 淡青灰色 胎土 密(砂粒を多 く含む) 焼成 良好
第17図-9	提瓶把手			ナデ調整	色調 黄灰白色 胎土 密(砂粒を多 く含む) 焼成 良好
第17図-10	土師器蓋	口径 22.3 残存高 26.1	口縁部は「く」の字 形に外反する。 側部中位に最大怪が あるが、ほぼ包弾形 を呈する。	外面は胴部に縱方向 のハケ目、内面は、 口縁部に横方向のハ ケ目を施したのちナ デ。胴部内面は磨滅 しておらず、 ハケ目 10/1.0 cm 1.5 cm 単位。	色調 明淡乳褐色 胎土 密 焼成 良好 (玄室内採集 丸亀市立資料館蔵)
第17図-11	杯蓋	口径 14.0 器高 4.5	口縁部は、下外方に 下り、端部は丸い。	ヘラケズリ 強 ヘラ切りの痕跡あり。 内面天井部ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 色調 染灰黒色。 胎土 密 焼成 良好 自然釉が見られる (伝竈塚)
第17図-12	長頸壺	残存高 13.4	口縁の形態は不明。 最大怪は肩部にあり、 中位上・下に凹線が 見られる。	中位下半 ヘラケズ リ調整。 ヘラ切りの痕跡あり。 他は回転ナデ調整。	色調 灰色 胎土 密(砂粒を多 く含む) 焼成 やや不良 (伝竈塚)

5 小 結

- ① 本墳は、尾根稜線上敵高地の緩斜面に等高線に直交して築造された両袖型横穴式石室を内部主体とする。
- ② 墳丘部は、天井石と玄室が欠損しているため確認できなかったが、円墳の径25m程度と伝えられている。
- ③ 埋葬主体部はN—Eに主軸をとり、略南西方向に開口する。渓道部床面はすでに攪乱を受けている。
- ④ 渓道部については、玄門部寄り3分の2は巨石を配し、渓門部寄りの3分の1と構築法がことなっている。これは、延長構築したものと考えられる。
- ⑤ 墓道は原形を保っており、塞閉は互層積みとなっており、追葬は1回実施していると考えられる。
- ⑥ 本墳の築造年代は、出土遺物から判断すると6世紀後半に比定される。
- ⑦ 本墳の副葬品は、すでに開口していたこと、玄室が工事により崩壊していることなどから、渓道より須恵器3点墓道より2点出土したのみで、出土品は少ない。

V 丸亀市立資料館所蔵資料

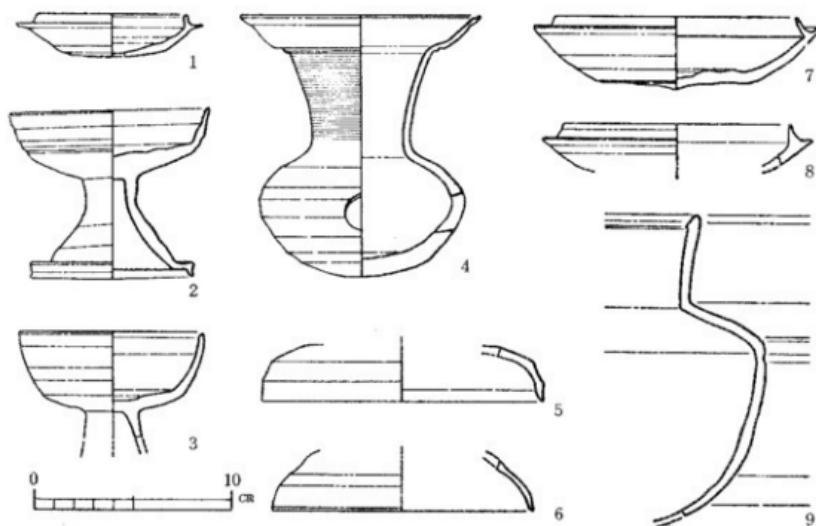
1. はじめに

ここで紹介しようとするのは、現在、丸亀市立資料館に所蔵されている考古資料の一部である。この資料の中には、金沢芳弘氏が青ノ山古墳群の各墳から表採されたもの、旧土器公民館で所蔵されていたものがある。

これらの資料は、青ノ山古墳群の動向及び土器川下流域の歴史を考えるうえで貴重であり、本概報の内容にも密接に関係している。出土地不詳のものが多くあるが、丸亀市域の今後の調査・研究に関係するものもあると考え、一応参考の為に掲載した。

各々の遺物について、実測・写真撮影・拓本などを行ったが、紙数の都合もあり、写真是全面的に削除し、一部実測図・拓本についても掲載しなかったものがある。これらのものについては、後日新めて紹介したいと考えている。

今回の発表に際して、金沢芳弘氏をはじめ、丸亀市立資料館館長伊藤利夫氏・同学芸員秋山徹氏の御理解・御協力を受けた。記して謝意を表したい。



第19図 青ノ山古墳群出土須恵器実測図

2. 青ノ山古墳群関係

青ノ山1号墳（山頂古墳）

1号墳からは、金環・鉄釘・須恵器が出土している。

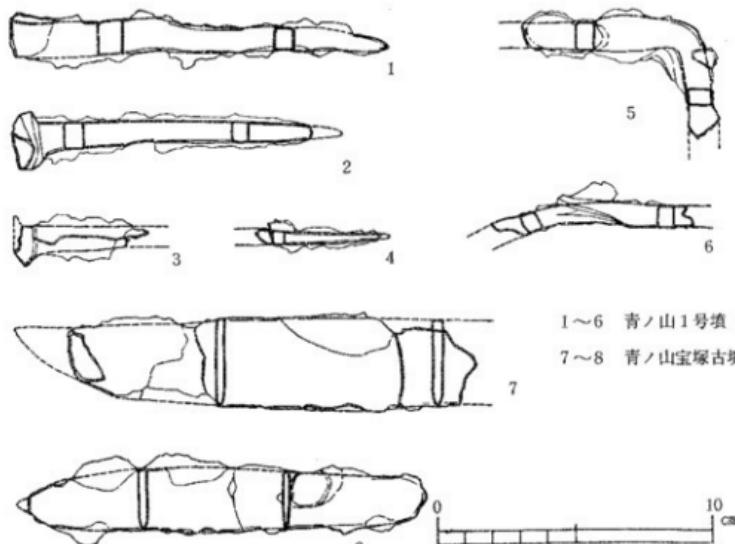
須恵器は、杯身1点・高杯2点である。

杯身は、口径7・4cmと小形で、葬送用の特殊なものである可能性がある。形態は、受部が水平で、立ちあがりもほぼ直立し、やや古い要素を持っているが、II～6段階に位置付けて大過なかろう。

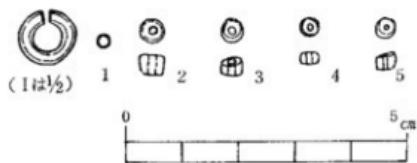
高杯は2点出土しており、完形である2の方に着目すれば、杯部・脚端部の形状から、II～6あるいはIII～1段階のものと推定できるが、類例を待ちたい。

鉄釘は、6点出土している。

1は、全長13.5cmを計り、断面は四角形を呈す。幅約1.2cm、厚みは約0.8cmで、頭部の形状は不明である。2は、現長10.7cmを計り、断面は四角形を呈し、幅約1cm、厚み約0.6cmで、頭部も四角形である。3は、頭部の破片で、四角形の頭部を持ち、幅0.7cmを計る。4は、先端部の破片で、幅0.5cm、厚み0.45cmの四角形の断面を呈す。5は、ほぼ直角に曲がっているので、カスガイの可能性が高いが、詳細は不明である。断面は四角形で、幅約1cm、厚み約0.7cmを計る。6は、やや湾曲しており、先端部と頭部を欠損しているが、断面は四角形で、幅約0.8cm、厚み約0.6cmを図る。



第20図 青ノ山古墳群出土鉄器実測図



第21図 青ノ山古墳群出土金環
ガラス小玉実測図

鉄釘・カスガイの出土は、この古墳に木棺が使用されていたためと考えているが、この他の古墳では、未だに確認されていない。

なお、金環については、現在なお金銅色が失われておらず、保存状態が良すぎることでかえって模造品の可能性もあり、1号墳に伴うものとするかどうかは判断しかねる。

青ノ山2号墳（中腹古墳）

第19図-4は、「昭和28年12月3日土器村郡屋飯野村境青野山中腹にて発掘」の記載があり、位置的にみて2号墳出土と判断した。

頸部が太く、口縁部内側に段を有することなどからⅡ-1段階に比定できると考えている。

宝塚古墳

宝塚古墳からは、須恵器杯蓋・身各2点と平瓶、鉄刀・刀子が出土している。

杯蓋・身は、口径から考えると5・7・6・8がほぼセット関係をなすと考えており、Ⅱ-5、Ⅱ-6段階の資料と考えられる。9は、全体の形態を見ることができず、時期は不明であるが、杯よりも若干新しいとも考えられる。

鉄刀は、ほぼ先端部の破片で、現長14.7cm、幅3.3cm、厚み0.4cmを計る直刀である。

刀子はほぼ完形であるが、鍛が著しく形態の詳細は不明である。現長14.2cm、幅2.1cm、厚み0.4cmを計る。

墓地公園東古墳

内部主体は箱式石棺で、出土遺物はガラス小玉が4点のみである。

1は、グリーン色で幅3.90mm、厚み3.15mm。

2は、薄青色で幅3.65mm、厚み2.60mm。

3は、濃青色で幅3.30mm、厚み2.10mm。

4は、薄緑色で、幅2.95mm、厚み2.80mm。

これらのガラス小玉の時期は不明である。

3. 青ノ山2号窯（仮称）

この資料には、「昭和29年1月12日、土器村字掛橋2692~2695、山地要助所有田地掘田より窯跡粘土と共に採取」の記載がある。

出土資料は、須恵器片とスサが混じった窯壁片がある。出土地は、現在平坦地で須恵器窯を構

築することができないと考えられ、これらの資料は他の地区からの搬入と考えて大過ない。正確な窯の位置は判明していないが、田の墳土として搬入されたものと考えているので、青ノ山南麓地区に1号窯以外にも窯跡が存在したと仮定して2号窯とした。この2号窯遺物の発見で、青ノ山南麓に複数の窯跡が存在した可能性が高くなつた。

出土須恵器中、杯蓋(1・2)、杯身(3・4・5・6)、短頸壺(8)、不明(9)、壺(10・11)を図化した。この他、これらの器種の破片が十数点ある。

杯蓋1・2は、この形態からⅠ-5・6段階に比定できよう。

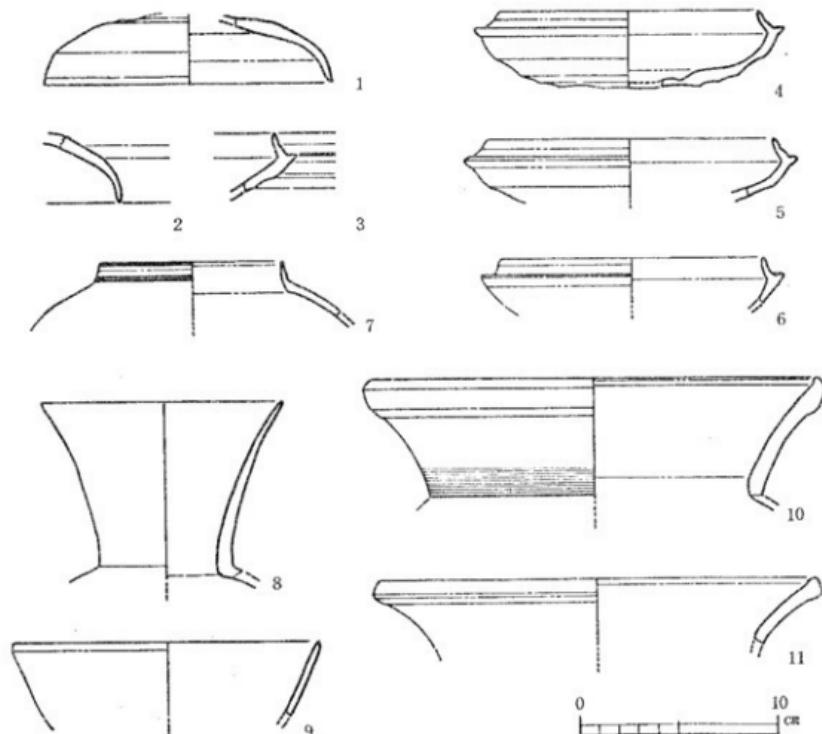
杯身3は、口径が大きく、器高が高くⅠ-4段階。

4・5は、Ⅱ-5段階。

6は、Ⅱ-4段階。

短頸壺・長頸壺・壺は、時期を比定できない。

出土資料から、2号窯は1号窯よりも一段階古くから操業されていたことになる。



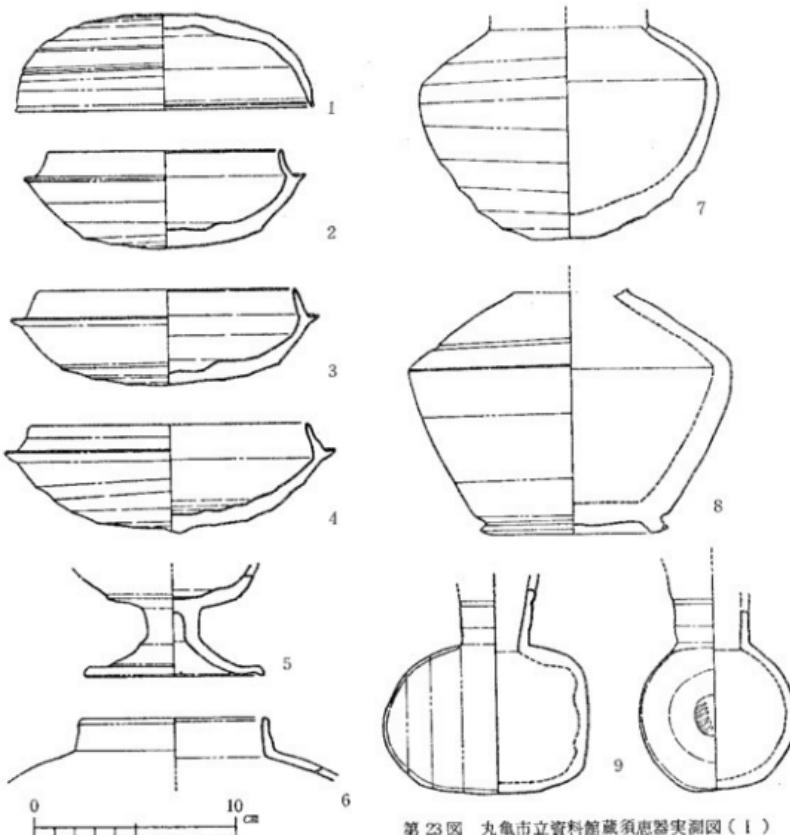
第22図 青ノ山2号窯出土須恵器実測図

4. その他

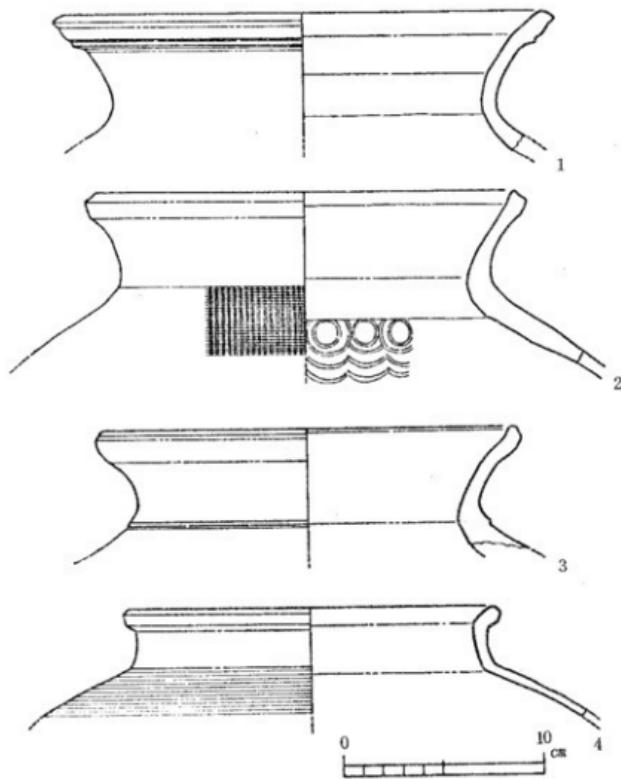
この他、須恵器・埴輪・中世土器があるが、このほとんどは出土地不詳である。旧土器公民館の所蔵ではあるが、この地区の出土遺物として限定はできない。

第23図1-4は、II-1段階に比定できる資料であるが、青ノ山2号墳出土の甌と同一時期とすることが可能、未発見の古墳から出土した可能性も高い。

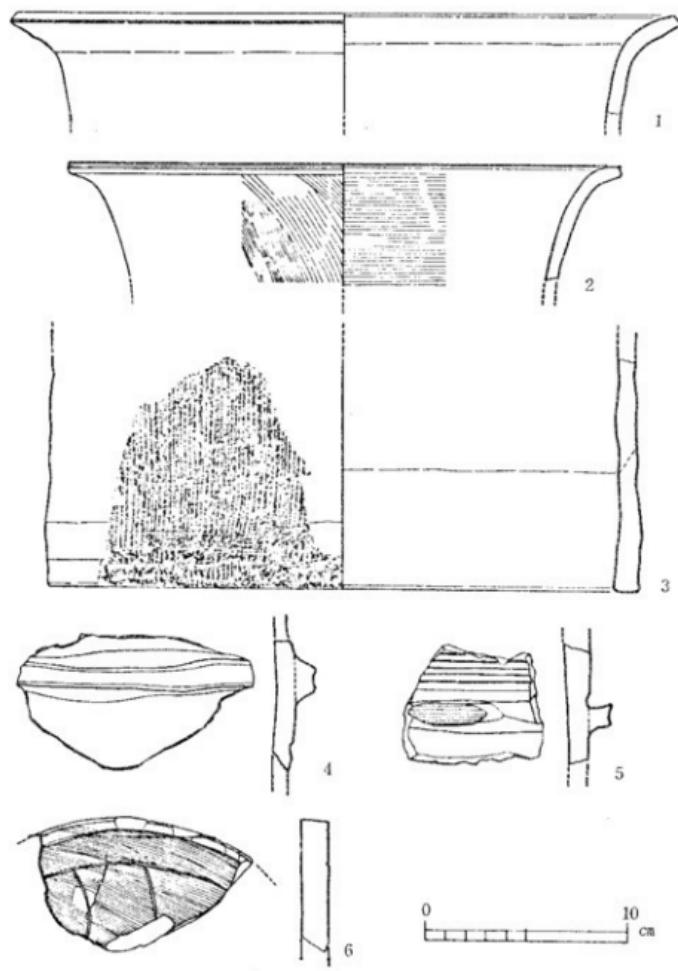
第23図-5は、「昭和28年12月土器村高津にて発掘」の記載があり、現在の丸亀市土器町高津出土として間違いあるまい。この地区では、金沢芳弘氏が埴輪片を採集されていることから、古墳時代中・後期の遺跡と考えられ、第23図5-9、第24図1-4、第25図1-6などが、この周辺で出土した可能性もある。



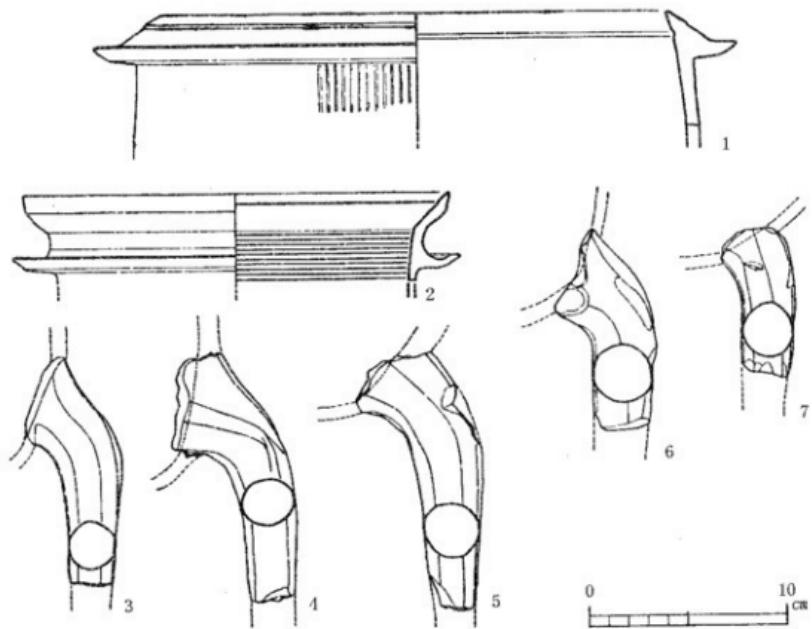
第23図 丸亀市立資料館藏須恵器実測図(1)



第24図 丸亀市立資料館藏須恵器実測図(Ⅱ)



第25図 丸龜市立資料館蔵埴輪実測図



第 26 図 丸亀市立資料館藏中世土器実測図

第4表 青ノ山古墳群遺物観察表

捕獲番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
青ノ山1 第19図-1	号墳 杯身	口径 7.4 残存高 2.3	たちあがりは、ほぼ直立してのび、端部は丸い。 たちあがり高、0.5程。受部は水平にのび、端部は鋭い。	ヘラケズリ2/3程 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 色調 茶褐色 胎土 密 焼成 やや不良
第19図-2	高杯	口径 9.9 器高 8.5	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 脚部 ゆるやかに外反したのち、端部で屈曲し、さらに下方へ屈曲させ段をなす。 杯部 口縁部は、内湾ぎみ、上外方にのび、端部は鋭い。	回転ナデ調整	色調 緑灰色 胎土 粗い(砂粒を多く含む) 焼成 良好 自然釉が見られる。
第19図-3	高杯	口径 9.2		回転ナデ調整	色調 茶灰褐色 胎土 密 焼成 良好
青ノ山2 第19図-4	号墳 甕	口径 11.8 器高 13.3	口頸部は、外反してのち、さらに外方へ屈曲させて段をなし、端部は内傾する段を有す。 体部は、球形を呈し、最大径が中位にある。	体部 1/3強ヘラケズリ 他は、回転ナデ調整。 頸部にクン目が見られる。	ロクロ回転、右方向。 色調 青灰白色 胎土 密(砂粒を若干含む) 焼成 良好
宝塚 第19図-5	古墳 杯蓋	口径 14.0	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は鋭い。	回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 色調 暗青灰色 胎土 密(砂粒を多く含む) 焼成 良好
第19図-6	杯蓋	口径 13.0	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。	回転ナデ調整。	色調 淡灰白色 胎土 粗い(砂粒を多く含む) 焼成 良好
第19図-7	杯身	口径 11.8 器高 3.8	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 たちあがり高、1.0弱 受部は、上外方にのび、端部は丸い。	ヘラ切りの痕跡あり。 回転ナデ調整。	色調 淡灰白色 胎土 密 焼成 良好
第19図-8	杯身	口径 11.0	たちあがりは、内傾してのび、端部は鋭い。 たちあがり高、1.0弱 受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。 口縁部は、わずかに外反し、端部内面に、かえり状の段を有す。 体部は、肩部が最大径となり、丸みをもち、明確な接線は見られない。 肩部に2本の凹線が見られる。	回転ナデ調整。	色調 淡灰白色 胎土 密 焼成 良好
第19図-9	平瓶			底部は、ヘラケズリのちナデ調整。 他は回転ナデ調整。	色調 淡灰白色 胎土 粗い(砂粒を多く含む) 焼成 不良

第5表 青ノ山2号窯遺物観察表

拂岡番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
第22図-1	杯蓋	口径 14.2	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。	天井部 ヘラケズリ。 口縁部外面ヘラケズリ。 他は回転ナデ調整 (部分的に紙方向の ヘラケズリ)	ロクロ回転、左方向。 暗青灰色 胎土 密(砂粒を多く含む) 焼成 良好
第22図-2	杯蓋		口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。	回転ナデ調整	色調 淡青灰色 胎土 密 焼成 良好
第22図-3	杯身		たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 たちあがり高、1.0 強 受部は水平にのび、端部は丸い。	ヘラケズリ 2/3強 他は回転ナデ調整。	色調 暗青灰色 胎土 密 焼成 良好
第22図-4	杯身	口径 13.0 器高 4.0	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 たちあがり高、1.0 強 受部は水平にのび、端部は丸い。	ヘラケズリ 2/3強 他は回転ナデ調整	ロクロ回転、右方向。 淡青灰色 胎土 密(砂粒を若干含む) 焼成 良好
第22図-5	杯身	口径 14.4	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 たちあがり高、1.0 強 受部は水平にのび、端部は鋭い。	ヘラケズリ 2/3強 他は回転ナデ調整	ロクロ回転 左方向。 暗青灰色 胎土 密(砂粒を若干含む) 焼成 良好
第22図-6	杯身	口径 13.2	たちあがりは、内湾してのび、端部は丸い。 たちあがり高、1.0 強 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ調整	色調 淡灰白色 胎土 密(砂粒を含む) 焼成 良好
第22図-7	短頸壺	口径 9.0	口縁部は、内傾してのび、端部は丸い。 口縁部上・下に沈線様のものあり。	回転ナデ調整	色調 暗青灰色 胎土 密 焼成 良好
第22図-8	長頸壺	口径 11.8	口縁部は外反してのび、端部は丸い。	回転ナデ調整	色調 暗灰白色 胎土 粗い(砂粒を多く含む) 焼成 良好 自然釉が見られる。
第22図-9	(不明)	口径 15.0	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ調整	色調 淡灰白色 胎土 密 焼成 良好
第22図-10	甕	口径 22.4	口縁部は、ゆるやかに外反し、端部外面が肥厚する。端部は丸い。頸部付近にカキ目が見られる。	回転ナデ調整	色調 淡青灰色 胎土 密(砂粒を含む) 焼成 良
第22図-11	甕	口径 22.0	口縁部は、ゆるやかに外反し、端部内外面が肥厚する。	回転ナデ調整	色調 淡青灰色 胎土 粗い(砂粒を多く含む) 焼成 良

第6表 丸亀市立資料館所蔵遺物観察表

挿図番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
第23図-1	杯蓋	口径 14.7 器高 4.8	口縁部は、下外方にふくらみながら下り、端部は丸く、内側に段を持つ。天井部と口縁部の境は凹線が入る。	ヘラケズリ $\frac{1}{2}$ 強、へら切りの痕跡あり。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転、左方向。 色調 暗灰白色 胎土 密 焼成 良好
第23図-2	杯身	口径 11.6 器高 4.9	たちあがりは、内湾しながら上内方に伸び、端部は丸い。 たちあがり高、1.4。 受部は水平に伸び、端部は丸い。	ヘラケズリ $\frac{2}{3}$ 弱 他は回転ナデ調整	ロクロ回転、左方向。 色調 暗灰黑色 胎土 密 焼成 良好
第23図-3	杯身	口径 12.6 器高 4.8	たちあがりは、直線的に上内方に伸び、端部は鋭く、内側に傾斜する。 たちあがり高、1.5。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。	ヘラケズリ $\frac{1}{2}$ 程 内底ナデ調整 他は回転ナデ調整	ロクロ回転、右方向。 色調 暗灰白色 胎土 密 焼成 良好
第23図-4	杯身	口径 13.7 器高 5.4	たちあがりは、直線的に上内方に伸び、端部は丸い。 たちあがり高、1.5。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。	ヘラケズリ $\frac{2}{3}$ 程 他は回転ナデ調整	ロクロ回転、右方向。 色調 明茶褐色 胎土 密 焼成 やや不良
第23図-5	高杯	底径 8.9	杯部は、基部から外湾しながら上外方に伸びる。 脚部は、基部からほぼ垂直に伸びたのち、ゆるやかに広がり、端部は丸い。	回転ナデ調整	ロクロ回転、左方向。 色調 灰色 胎土 密 焼成 やや不良 〔昭和28年12月土器村高津にて発掘〕
第23図-6	短頸壺	口径 9.0	口縁部は直線的に上方に伸び、端部は丸い。	体部外面は、叩き目ののち回転ナデ調整 他は回転ナデ調整	色調 暗青灰色 胎土 密（砂粒をやや多く含む） 焼成 良好
第23図-7	短頸壺		体部はほぼ球形を呈し、肩部に最大径がある。	ヘラ削り $\frac{1}{2}$ 他は回転ナデ調整	ロクロ回転、左方向。 色調 暗灰白色 胎土 密（砂粒を含む） 焼成 良好
第23図-8	長頸壺	底径 8.0	最大径は頸部から $\frac{1}{2}$ にあたる肩部にあり、頸部から肩部、肩部から底部へは、ややふくらみながらも直線的に伸びる。 高台は、かかる部が接点となり、ややつま先が上がる。	外面底部ナデ調整 他は回転ナデ調整 内部底部は不明。	色調 淡青灰色 胎土 密（砂粒を含む） 焼成 良好

挿図番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
第23図-9	壺瓶		口縁端部は欠損している。体部は包弾を壺に倒したような形を呈する。	側面平坦部は叩きのちナデ調整。 他は回転ナデ調整 体部内面不明。	色調 淡灰白色 胎土 密 焼成 良好 部分的に自然釉が見られる。
第24図-1	壺	口径 23.8	頸部が不明瞭で、体部から口縁部にかけては、内湾したのちほぼ直線的に外上方にのびる。 口縁部は、口唇部坦面部が外下方に傾き、口縁端部外面のみ肥厚する。	口縁部は内・外面とも回転ナデ調整。	色調 淡青灰色 胎土 密(砂粒を含む) 焼成 良好
第24図-2	壺	口径 20.8	頸部は不明瞭で、かすかに稜線がはいる。 口縁部は、体部から内湾したのちほぼ直線的に外上方にのびる。口縁部は、口唇部坦面部が外下方に傾き、口縁端部外面のみ肥厚する。	口縁部は内・外面とも回転ナデ調整。 体部は、外面が縱方向の叩目のち横方向のカキ目。内面は同心円形の叩目を施す。	色調 淡灰白色 胎土 密(砂粒を含む) 焼成 良好 部分的に自然釉が見られる。
第24図-3	壺	口径 20.5	頸部には段が見られる。 口縁部は、頸部からやや内上方に伸びたのち、外湾しながら外上方に伸び、端部に至って若干上方に伸び、端部は丸い。 口縁端部外面がやや肥厚する。	口縁部は内・外面とも回転ナデ調整。 体部外面は、横方向の平行叩目を施すが、自然釉によつて詳細は不明である。 体部内面は、青海波文の叩目を施す。	色調 黄灰色 胎土 密(砂粒やや多い) 焼成 良
第24図-4	壺	口径 18.2	体部はゆるやかに内湾しながら頸部に至る。 口縁部は頸部から内湾しながら上方に伸びたのち外上方に折れる。	口縁部は内・外面とも回転ナデ調整。 体部外面はカキ目。 体部内面には叩きが施されるが、磨滅が著しく詳細不明。	色調 淡灰白色 胎土 密 焼成 不良
第25図-1	円筒埴輪	口径 32.1	口縁部は、外湾しながら外上方に伸び、口唇坦面部が外下方に傾く。		色調 淡乳褐色 胎土 粗い 焼成 良
第25図-2	円筒埴輪	口径 27.0	口縁部は、外湾しながら外上方に伸びる。	口唇部内・外面ともナデ調整。 外面は左上→右下方に向かって刷毛目が施されるが、原体がいくつあるようである。 内面は横方向の刷毛目。単位は不明。	色調 淡赤褐色 胎土 粗い 焼成 良

掲図番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
第25図-3	埴輪底部	底径 29.0	ほぼ直線的である。	外面は綫方向の刷毛目、底端部のみのちナデ調整 内面は不明、底端部に指押えの痕跡らしきものが見られる。	色調 淡赤褐色 胎土 粗い 焼成 良好
第25図-4	円筒埴輪		タガは、断面が台形を呈し、上面が少しくぼむ。		色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 良好
第25図-5	円筒埴輪		タガは、断面が四角形を呈し、上面が少しくぼむ。	タガの上面はナデ調整。外面は横方向の刷毛目を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 良好
第25図-6	盾形埴輪		上方が円弧を描くよう伸びている。	単位(8本/1cm)の刷毛目調整のうち、沈線を加えている。全体の文様は不明である。	色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 良好
第26図-1	土師質羽釜	口径 24.8 ツバ径 31.8	体部はほぼ直線的に伸び、ゆるやかに外湾しながらツバ部先端に至る。 口唇部からツバ部先端には、なだらかな曲線を描く。 口縁端部・ツバ端部とも続い。口縁部のほぼ中央に段があり、対応する内面には凹線が見られる。	体部外面には綫方向の刷毛目が施されており、他はナデ調整である。	色調 淡赤褐色 胎土 粗い 焼成 良
第26図-2	土師質羽釜	口径 21.0 ツバ径 22.0	ツバ部は受皿状を呈し、上方に伸びたのち上方に折れ、先端部で再度上方に向い、口縁部を形成する。	外面はナデ調整。口縁部内面は刷毛目のちナデ調整、体部内面は横方向の刷毛目調整を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 密(やや砂粒が多い) 焼成 良好
第26図-3	土師質土鍋 脚部	径 2.25	面取りの痕跡が見られる。	不明	色調 乳白色 胎土 粗 焼成 良
第26図-4	土師質土鍋 脚部	径 2.6		不明	色調 淡灰白色 胎土 密 焼成 良好
第26図-5	土師質土鍋 脚部	径 2.75		不明	色調 乳白色 胎土 粗い 焼成 良
第26図-6	土師質土鍋 脚部	径 3.0	面取りの痕跡が見られる。	不明	色調 淡茶褐色 胎土 密 焼成 良
第26図-7	土師質土鍋 脚部	径 2.6		不明	色調 淡茶褐色 胎土 密 焼成 良

VIIまとめにかえて

青ノ山7号墳と1・2号窯の関係

7号墳調査中に1号窯の存在が確認され、引き続いて2号窯の可能性が強くなってきたことは、讃岐における横穴式石室の導入と須恵器窯の成立について、興味深い事例を提示したことになる。

大形横穴式石室墳と須恵器窯の有機的な関係はまさに指摘されているが、青ノ山の事例は、古墳群中の発見であり、まさに好例として位置付けられよう。^{注1}

現在判明している遺物の年代観を、須恵器の型式名で示したのが第7表であり、この表を見ても明白なように、群集墳の成立とともに須恵器窯の操業も開始されるということは、広い意味での墓域の概念が明確であったこと。須恵器が副葬品として、又は造墓活動に重要な意味があったことが理解される。また、讃岐においては、先にも述べたように、各群集墳に対して須恵器窯が付属する傾向があり、古墳時代後期における非流通・各地域の分立状態が予想される。^{注2}

ところで、ごく近距離で確認された7号墳と1号窯であるが、同一形態の須恵器は確認されなかった。時間帯も共通する部分がありながら、こうした状況が確認されることから、別の窯が存在する可能性も考えられる。このことは、7号墳出土杯蓋(第17図-1・2)についても言える。この2例は、現時点では未見であり、1・2号窯出土遺物中にもその破片すら確認できることからしても、別の窯が青ノ山山麓中に存在している可能性が高い。なお、墓地公園造成時に、進入道路建設に伴って多量の土器片が出土したという話も聞いており、破壊されていることも考えられる。この地点は同一尾根の南西斜面にあたる。

青ノ山古墳群の動向

現在、青ノ山古墳群の中で出土遺物が判明しており、その築造年代の一端がおさえられるものは次の5基である。

遺跡名 古墳形 式 (段階)	1 号 窯	2 号 窯	1 号 墳	2 号 墳	6 号 墳	7 号 墳	7 号 墳
II-1				●			
-2							
-3							
-4	●	●					
-5	●	○					
-6	●						
III-1	●		●		●	●	
-2	●						

第7表 出土須恵器から見た
青ノ山古墳群の動向

1号窯・2号窯出土資料をも含めてその動向を表にしたもののが、第7表である。

現時点では、青ノ山古墳群全体で何基の古墳が存在しているのかは、詳細な分布調査が行われておらず不明であり、5基の古墳でその消長を表すことができるかどうか自信はないが、少くともその一端を明確にすることはできよう。

青ノ山山麓に位置する古墳のなかで最初に出現するものは、吉岡神社古墳(前方後円墳・全長50m)である。吉岡神社古墳は、判明している出土遺物(筒形銅器・銅

鏡など)からして4世紀後半~末頃に位置付けられる。



第27図 青ノ山古墳群分布図

第8表 青ノ山古墳群一覧表

番号	遺跡名	墳形	主体部	出土遺物	備考
1	宝塚古墳	円墳	横穴式石室	須恵器	
2			箱式石棺		
3		円墳			
4			横穴式石室	須恵器 2点	金沢氏発見
5			堅穴式石室		金沢氏発見
6			横穴式石室		金沢氏発見
7	青ノ山1号墳(山頂古墳)	方墳?	横穴式石室	須恵器・金環	
8	青ノ山2号墳(山腹古墳)		堅穴式石室		
9	青ノ山3号墳	円墳	横穴式石室		
10	青ノ山4号墳		横穴式石室		
11	青ノ山5号墳		横穴式石室	須恵器	L字形石室
12	青ノ山6号墳		横穴式石室	須恵器	須恵器窓
13	青ノ山1号窓跡				
14	青ノ山7号墳(東側)		横穴式石室	須恵器・土師器・金環	古墳状隆起(消滅)
15					石棺内面に朱彩が見られる。
16	墓地公園東古墳	円墳?	箱式石棺	ガラス玉	
17	青ノ山2号窓跡			空壁・須恵器	本来の位置ではない。
18					
19	吉岡神社古墳	前方後円墳	箱式石棺 堅穴式石室	筒形彌器・銅鏡	

吉岡神社古墳に後続する5世紀代の古墳として、墓地公園東古墳を考えている。墓地公園東古墳を5世紀代に比定する積極的な根拠はない。ただ、その立地が墓地公園東側の標高86.5mのピークであること、円墳で主体部が箱式棺であること、現在露出している箱式棺が中心部からはずれており、多葬墓の可能性が高いこと、出土遺物はガラス小玉4ヶが確認されているのみであることなどがその理由である。

6世紀に入ると、初頭に位置付けられる2号墳が築造される。2号墳出土とした須恵器窓は、確実な出土とは言えず若干の疑問はあるが、構造が横穴式石室ではなく、堅穴式石室に類似することで、この段階の古墳と推定している。このことは、構造上の相違点から、他の横穴式石室と同時期とは考えられず、これより先行する形態として考えている為である。

青ノ山山麓に、集中的に古墳が築造され群集墳として成立するのは、6世紀後半～7世紀前半にかけてである。覆被への横穴式石室の導入の時期にはほぼ合致すると考えられる。

第Ⅰ期（6世紀後半）この時期の古墳として、6号墳と7号墳があげられる。6号墳は、L字形を呈する横穴式石室を主体部とする円墳である。¹¹³玄室の大きさから单葬墓と考えられること、談道部が狭小で本来の役割りをはたせなかつたと考えられることから、この地域での初期横穴式石室として、单葬の堅穴式石室の延長線上に位置付けられよう。

7号墳は、伝竪塚出土といわれる杯蓋の年代からしてこの時期に一応考えているが、この年代を裏付ける調査資料が検出されなかったこと、石室が定型化して大形であることを考慮すると、次の段階に位置付けた方がより妥当性が高いかもしれない。

第Ⅱ期（6世紀後半～末）この時期の古墳には、宝塚古墳がある。詳細は不明であるが、横穴式石室を主体部を持つ円墳である。

第Ⅳ期（6世紀末）この時期の古墳として、1号墳がある。1号墳は、青ノ山山頂の平坦面に位置し、方墳の可能性が高い。なお、山頂部で新たに一基確認されたが、その詳細は不明である。^{注4}他、山頂部には横穴式石室の石材と考えられる残石が多く散乱しており、本来複数の古墳が築造されていた可能性もある。

以上、年代が判明している古墳の概略を述べたが、この結果から、6世紀後半～末の段階が築造のピークであろうと推定している。これは、横穴式石室の多くは定型化しており、Ⅱ期以降の築造であること、7世紀前半には追葬が主となり造墓活動が見られなくなることからも明白であろう。

次の問題として、現在判明している古墳の分布があげられる。第27図でも明らかのように、分布が単発かつ散在的である。3号墳周辺にかつては3基の古墳が報告されていること、6番の古墳のように、現在住宅の下に位置しているものもあり、青ノ山西麓では破壊されたものが多いことが推測される。青ノ山山頂の事例からしても、現存している古墳がそれぞれの支群の残存状況を表わしていることも考えられよう。

古墳時代における青ノ山古墳群の位置付けは、今後その内容がより詳細になるにつれて重要性を増すことであろう。

丸亀平野における青ノ山古墳群の位置

丸亀平野及び周辺地域を一つの単位と仮定し、こうした単位=地域内での青ノ山古墳群の位置付けを考えてみたい。

この場合、古墳・古墳群の消長が、一つの勢力の消長を具現化しているとの立場にたってある。^{注5}

古墳時代前期は、野田院古墳に代表される金倉川流域の古墳・ミタライ山古墳に代表される弘田川流域の古墳・吉岡神社古墳に見られる土器川下流域の古墳がある。土器川中流域のグループもあるが、内容が不明確であり今回はあえて除外し、上記三グループの関係について考えてみたい。

上記三グループは、少なくとも前期後半の時点では成立していたものと推定できる。このうち、弥生時代後期からの遺跡の連続性を見た場合、金倉川グループだけが連続していたとすることができる。金倉川グループの成立基盤は、弥生時代中期以降の大遺跡である善通寺市練兵場遺跡に代表されるこの地区的安定した経済基盤とことができよう。

他二地区では、こうした連続性が見られず、前期後半段階での金倉川グループからの分派的な状況を想定している。

ここで問題となるのは、吉岡神社古墳を金倉川グループとの関係でとらえるか、西の大東川流域グループ（川津茶臼山古墳・所謂「船載三角縁神獸鏡」を出土）との関係でとらえるかである。土器川と大東川との間の狭小な平野部での二つのグループを考えるより、土器川の西に広がる丸

亀平野との関係で考える方が、より自然であるとの主観的立場から、金倉川グループを重視したい。この問題については、資料を持って再度考えることにする。

次に、中期以降の古墳の動向であるが、弘田川グループでは、盛土山古墳・中東古墳群などの平地型の古墳が成立し、後期に至ってもなお向井原古墳などの古墳がみられ、一応連続性が指摘できる。

金倉川グループも、中期段階では舟形石棺を主体部とする追藤塚古墳などがあり、後期段階でも宮ヶ尾古墳などがある。

ところが、土器川グループの場合、他の二地域に匹敵するような中期古墳が存在せず、後期に至ってようやく青ノ山古墳群・飯野山北號古墳群などが成立する。

こうした状況は、古墳時代中期の段階で、土器川下流域には一種の勢力空白の時間帯があった^{注9}と考えられる。V-4で若干ふれたが、高津地区で埴輪片（4世紀末～5世紀初と推定）と後期末の須恵器が採集されていることからも、中期段階の欠落は裏付けられよう。

この主たる背景には、土器川の持つ不安定性（大河川の氾濫）があったのではなかろうか。こうした自然の力によって経済基盤が失われ、土器川流域の勢力は再び金倉川流域の勢力に吸収されたものと考えたい。

現在、年代の比定できる古墳が少なく、各地域の古墳・古墳群の特徴=地域性や消長が確実には把握しにくい状況がある。今後、こうした地域の資料が増加するに従い、より緻密な地域論が展開されるであろう。こうした意味において、この概報が一資料にとどまることなく、地域史研究に役立つことを祈り、本概報のまとめにかえたいた。

＜注＞ 1. 森浩一「南海道の古代葬業遺跡とその問題」『日本歴史』237号

2. 注1 渡部明夫「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』1980

3. 「青ノ山16号墳調査報告」丸亀市教育委員会・香川県教育委員会 1977

4. 本書P5 注⑧

5. 注3と同じ

6. 調査例が少なく、その内容も不明なものが多いが、前方後円墳の概略については、玉城一枝「讃岐の前方後円墳」『香川史学』8号 1979を参考にした。

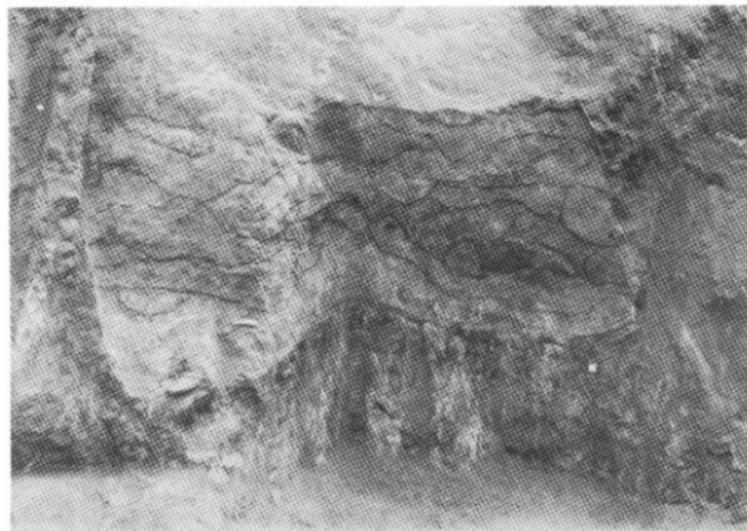
7. 香川県立善通寺第一高校歴史同好会「善通寺市及び近郊における弥生式文化の生成と展開」『文化財協会報』特別号7

8. 同前 番号64 小林行雄「三角縁波文帶神獸鏡の研究」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』1979

9. 実見



(1) 1号窯現状（調査前）



(2) 1号窯現状（調査開始後）

図版2



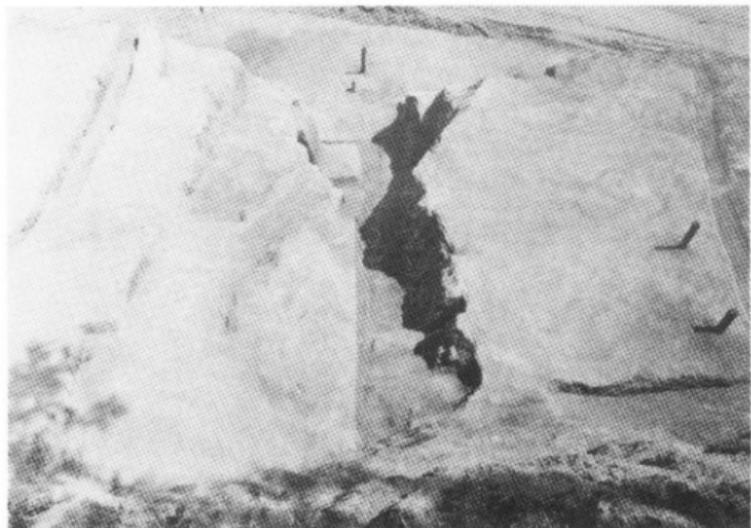
(1) 1号窯横断面（北から）



(2) 1号窯近景（北から）



(1) 1号窯全景(北から)



(2) 1号窯全景(南から)



(1) 1号窯遠景（調査終了後）



(2) 1号窯遠景（埋め戻し状況）

7号墳

1号塚

図版5



(1) 調査区遠景（北東から）



(2) 7号墳玄門部



(1) 7号墳玄門部(調査前)



(2) 7号墳調査風景(西から)



(1) 7号墳羨道西壁(南東から)



(2) 7号墳羨道東壁(南西から)



(1) 7号墳羨門部西壁(東から)



(2) 7号墳羨門部東壁(西から)



(1) 7号墳羨道西壁全景(南東から)



(2) 7号墳羨道東壁全景(南西から)



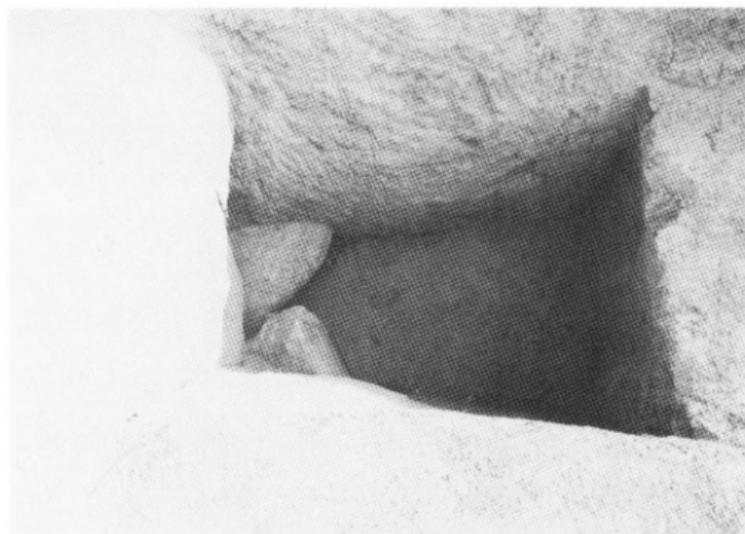
(1) 7号墳羨道全景(南から)



(2) 7号墳羨道全景(南・上方から)



(1) 7号墳第Ⅱトレンチ（南から）



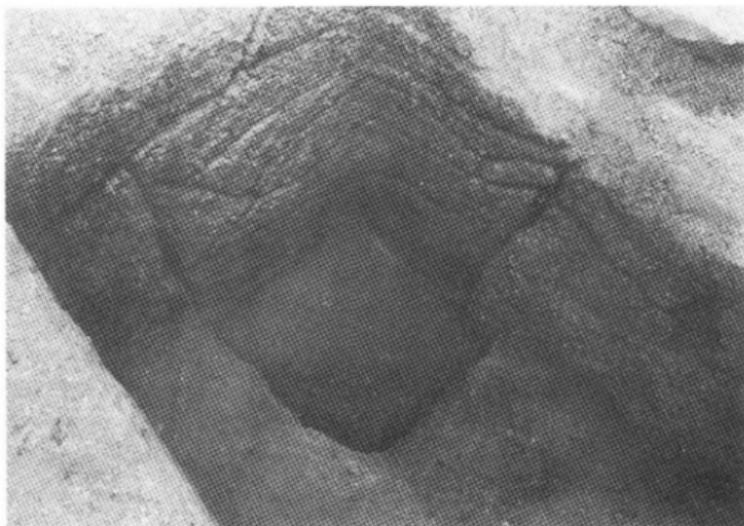
(2) 7号墳第Ⅱトレンチ（北から）



(1) 7号墳第Ⅲトレンチ（北から）



(2) 7号墳第Ⅲトレンチ（東から）



(1) 第Ⅳトレンチ全景(南西から)

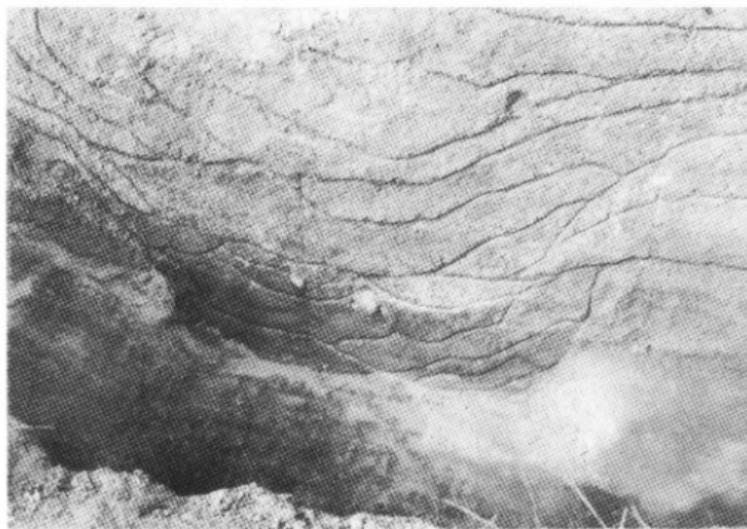


(2) 第Ⅴトレンチ全景(東から)

(1) 7号墳義道及び義門閉塞部（南から）

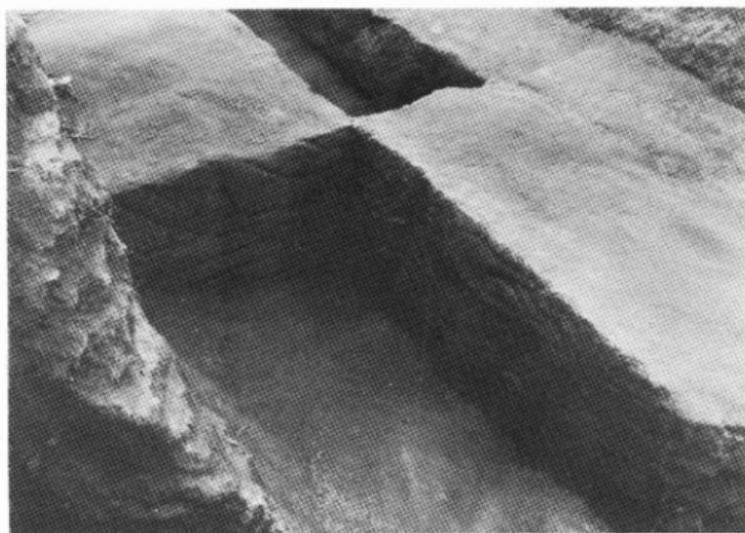


(2) 7号墳第一トレンチ北壁（南から）

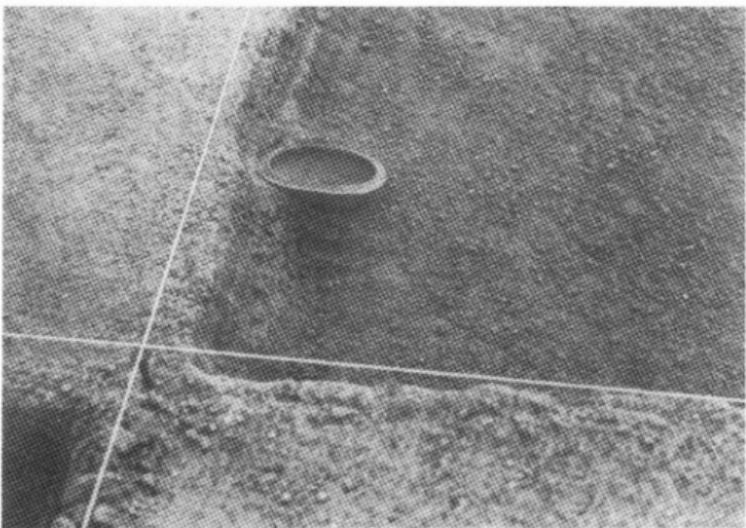




(1) 7号墳墓道上面（北西から）



(2) 7号墳墓道縦横断（南西から）

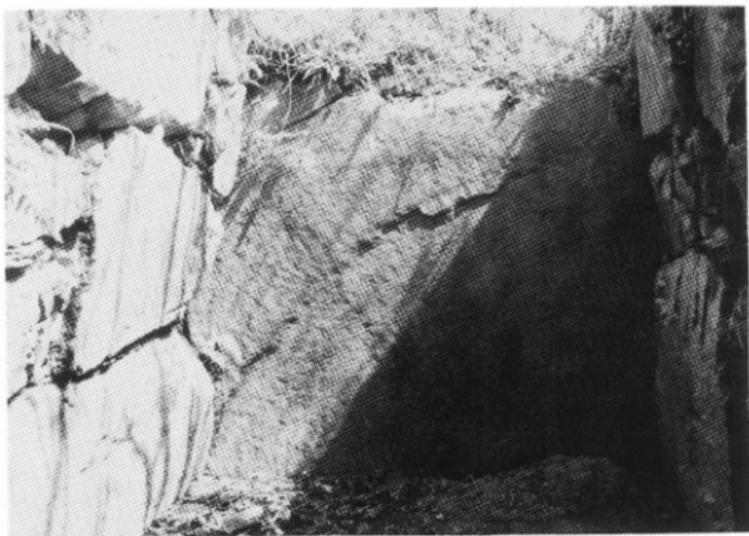


(1) 7号墳墓道内須恵器出土状況(北から)

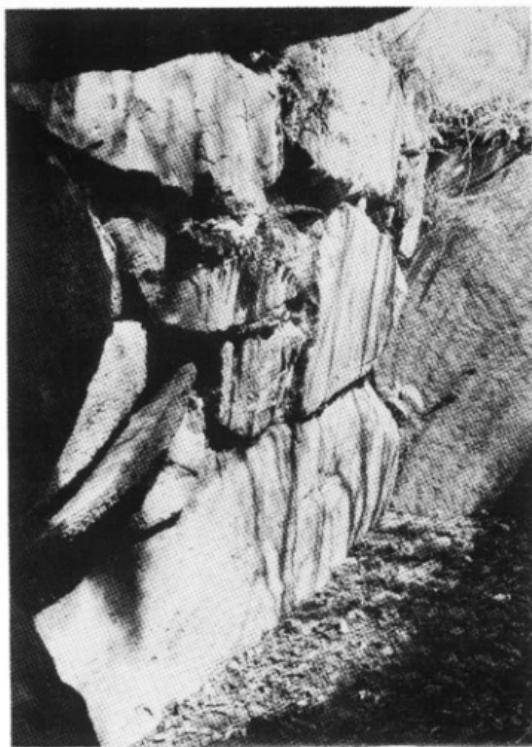


(2) 7号墳玄門部(北から)

(1) 青ノ山7号墳（奥壁）破壊前

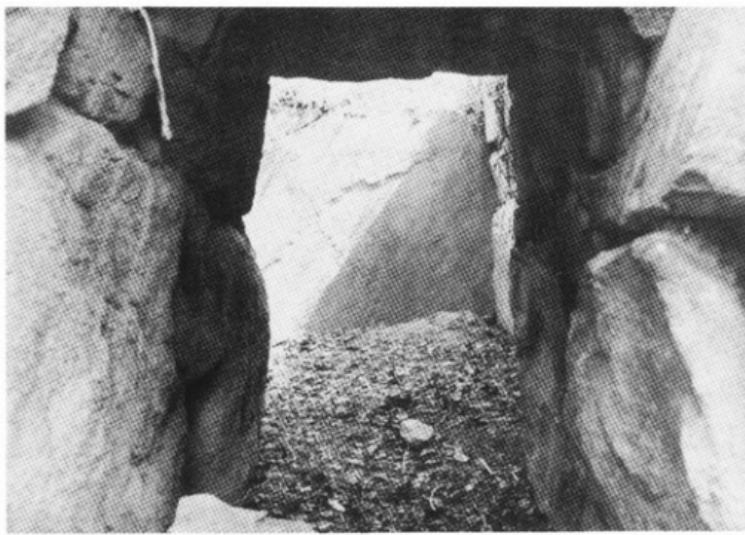


(2) 青ノ山7号墳（西側壁）破壊前





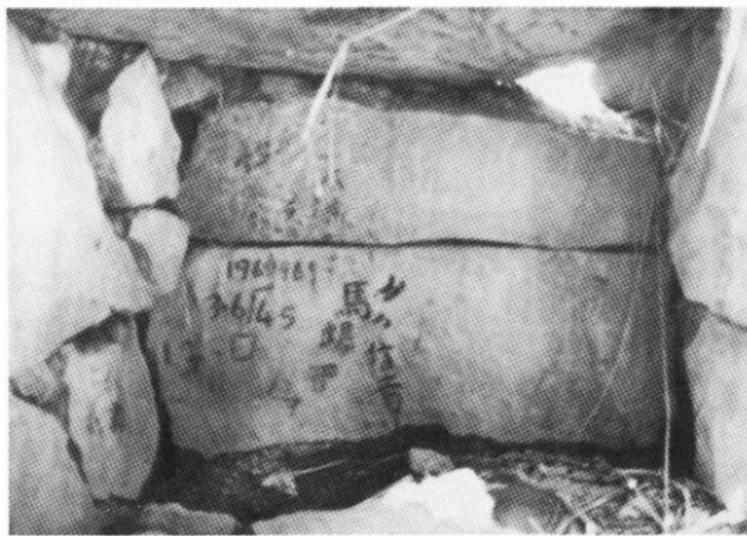
(1) 青ノ山7号墳（玄門部）破壊前



(2) 青ノ山7号墳（羨道から奥壁を望む）破壊前



(1) 青ノ山1号墳の現状



(2) 青ノ山1号墳（奥壁）



(1) 墓地公園東古墳の現状



(2) 青ノ山 3号墳の現状

青ノ山南麓における
埋蔵文化財調査概報

—香川県丸亀市飯野町所在の
後期古墳と須恵器窯の調査—

1980年9月30日 発行

発行 丸亀市教育委員会
丸亀市大手町2-1

印刷 若葉プリント
高松市塩上町2丁目10-24